

関西菌類談話会会報

2015年1月 No. 31

(上田俊穂先生追悼号)

目 次

ありし日の上田俊穂先生	2
上田先生を悼む	衣田 雅人… 3
上田俊穂先生と思い出深い2, 3のベニタケの過去・現在	下野 義人… 6
上田先生の思い出	橋屋 誠… 16
上田先生を偲んで	出合 文子… 16
上田先生との思い出	橋本貴美子… 17
上田俊穂先生ありがとうさんでした	奥沢 康正… 19
高校生からの葉書	萩本 宏… 20
上田俊穂先生を偲んで	鎌田佐代子… 21
上田俊穂先生に講師をお願いしました	平澤 一男… 22
上田先生の思い出 2011年5月2日	小寺 祐三… 23
上田俊穂先生の思い出	西田富士夫… 25
上田俊穂先生の思い出	岩瀬 剛二… 26
上田俊穂さんから寄せられたナガエノスギタケ情報とヒミズ標本	相良 直彦… 27
上田俊穂先生ご指導ありがとうございました	田中 光彦… 31
大阪市立自然史博物館の菌類コレクションと上田俊穂先生	佐久間大輔… 32
上田先生の思い出	田中久美子… 34
福島県内で見られるニセクロハツ類似きのこについて	広井 勝… 36
上田俊穂先生の思い出	丸山健一郎… 41
上田俊穂君の思い出	西川 喜朗… 44
上田俊穂さんの思い出	河合 繁好… 46
編集後記	天野 典英… 48



ありし日の上田俊穂先生（1941年3月1日～2013年9月15日）手作りのタペストリーと共に、関西菌類談話会第21回きこ展会場で小寺祐三氏撮影

上田先生を悼む

衣 田 雅 人

はじめに

私が関西菌類談話会に入会したのは1974年頃だと思います。上田先生はその頃には役員として活動されていたのではないかと思います。上田先生がきのこに出会ったきっかけや浜田先生、本郷先生そして恩師の衣川先生との出会いについて、私が知ることができたのは、上田先生が投稿された関西菌類談話会50周年記念誌（2008年7月）や本郷次雄先生追悼集関西菌類談話会会報 No. 27（2009年1月）の原稿からです。それらの原稿から、上田先生のきのこ先生方との出会いを紹介することにより、皆さんとともに上田先生を追悼したいと思います。

きのこの出会い

上田先生は子供のころから理科に興味を持つ「変わった子」でしたと述べられています。中学生時代には、なぜか化学に強い興味を持つようになり、京都市立洛陽高等学校工業化学科に入学さ

れました。当時、授業についていくのに必死で、授業が苦痛であったと述べられています。その逃避場所として、生物部に入り、校内の図書館でいろいろな図鑑を見ておられたそうです。ある日、書棚の図鑑類を見ていると、保育社の「原色日本菌類図鑑」が目にとまりました。そして、取り出して中を見てみると、そこにはいろいろな色・形のきのこがあり、「こんな不思議な生物の世界があるのか!」と感動されたそうです。また、きのこに多くの未知種があることにも驚かれました。それを契機に、何度もその図鑑を見て、きのこを採集し、名前を調べるようになったそうです。

先生方との出会い

上田先生がきのこの名前を調べるのに苦労している様子や、わからない用語で困っているのを見られた生物部顧問の先生は、上田先生に「京都大学に浜田稔先生というきのこの博士がいらっしゃるの、その先生にわからないことを聞きに行っ



古い写真が出てきました。きのこ展のバックヤードで撮影したものです。前列左から、上田先生、故山本先生（二代目会長）の奥様、丸西さん、後列左から筆者そして下野さんです。

たらどうか？」と助言されました。数週間後、上田先生は浜田先生を訪ねて京都大学に行かれました。浜田先生に会われた上田先生は、先生から「日本にはきのこに関する良書が少なく、やっと菌類図鑑ができたこと、きのこの研究をするには大学へ行った方がいいこと、そのためにはきのこの勉強もいいが、大学に入る努力も必要であること、外国語をしっかりと学ぶこと、きのこの名を知るには、樹木の名も知らねばならないこと、きのこが生えている現地へ行って、自分の目で確かめることなど…」多くのことを学ばれました。上田先生は、自分が高校生にも関わらず、浜田先生のこうした丁寧な対応に感激されました。その後、浜田先生から上田先生のもとに日本菌学会関西談話会の案内状が届きました。それが、上田先生が関西菌類談話会に入会するきっかけとなりました。

上田先生は何度も「原色菌類図鑑」を見るうちに、著者が今関六也と本郷次雄という先生で、本郷先生が滋賀大学に勤務されていることを知りました。また、上田先生はもともと滋賀県人なので、まだ会ったこともない本郷先生に親しみを抱

かれ、これが本郷先生との最初の出会いだと述べられています。図鑑に載っているきのこは、その多くを著者たちが描いた図であることを知り、上田先生も自分できのこの図を描き始めました。その図を絵画でも有名な生物部顧問の先生に見ていただくと、「なかなかうまいねえ」とほめられ、大いに励みになったそうです。ある日、浜田先生から本郷先生を紹介されました。本郷先生には、上田先生が描いたスケッチを見ていただき、伏見の稲荷神社で採った「タマゴテングタケ」と自分で同定したスケッチに「私はまだタマゴテングタケは見たことがありません。これはタマゴテングタケではなく *Amanita pseudoporphyria* です」と学名を書いて下さったそうです。「本郷先生には、その後数十年間にわたり、きのこのことを教えて頂くことになりました」と述べられています。

高校3年生の時、上田先生は「きのこの勉強をするには、何はともあれ大学に入りなさい」と浜田・本郷両先生に強く勧められました。しかし、上田先生は学力的にも経済的にも大学へ行くのは無理だと考え、神戸税関への就職も決まっていた。しかし、直前に両親や親戚の勧めで大学進



2012年9月に上田先生が参加された日和田高原観察会の集合写真です。

学の決心をされました。その1年後、大阪府立大学農学部に入学されました。上田先生が大学3年生の時、浜田先生の研究室におられた衣川堅二郎先生が上田先生の在籍している大阪府立大学農学部遺伝育種学研究室に来られました。上田先生はその時以来、衣川先生を4人目の師として、きのこだけではなく様々な多くのご指導を受けることになりました。上田先生がよく言われていた「私は衣川先生に厳しい指導を受けたので、文章にはうるさいのです」という言葉を思い出します。実は、私も一度衣川先生に論文指導を受けたことがあるからです。

大学卒業後、上田先生は大学院修士課程に進まれました。そしてその後、定時制高校で勤務することになり、数年後に大阪から大津の膳所へ引越されました。そして、しばしば滋賀大学を訪れ、本郷先生のご指導を仰がれました。その後、大阪に戻られ、2001年まで大阪府立高等学校の教諭として勤務されました。

おわりに

上田先生は会報初代編集委員長や事務局などを務められたあと、2001年から2004年まで会長を、そして、2003年から2007年まできのこ展実行委員長を務められました。また、きのこ展で販売したり、きのこ展スタッフに配ったりするため、きのこをデザインした日本手ぬぐいを製作していただきました。上田先生はとても器用な方で、特にきのこのデザイン画が素晴らしく、きのこのパズルなども作成されました。また、山と溪谷社の「日本のきのこ」などのきのこに関する多くの図書を執筆されています。

私にとって、上田先生は優しいお兄さんのような方で、上田先生から会長を引き継いだ私は、会の運営など何か困ったときには適切な助言をして頂きました。

上田先生のご冥福をお祈りします。

(2014年3月1日受付)

上田俊穂先生と思い出深い2, 3のベニタケの過去・現在

三重大学大学院 生物資源学研究所 下野 義人

2013年9月15日に上田俊穂先生が享年72歳でお亡くなりになりました。これからまだまだご一緒に研究できると思っていたのですが、できなくなり、非常に残念です。私と上田俊穂先生との関わり、および一緒に研究した数種のベニタケ属の報告を行い、先生への追悼文にしたいと思います。なお、この文は2014年2月8日に龍谷大学で行われた関西菌類談話会講演会（下野，2014）で発表した内容を元にして書き加えたものです。

1. 知り合ったきっかけ

私が上田俊穂先生に最初に出会ったのは、1978年7月9日に行われた関西菌類談話会の近江神宮菌類観察会です。上田俊穂先生との付き合いは36年になります。その菌類観察会できのこがシートに多数並べられているのを見て、私はいろいろなきのこがあることに感激しました。滋賀大学の横山和正先生がこの観察会を取り仕切っておられたと思います。きのこに名前が付いていきましたが、ベニタケ属に関してはニオイコベニタケ、ムラサキカスリタケ、カワリハツ、クロハツ、シロハツ等だけで、多くの不明種があり、名前が付いていませんでした。どうして名前が付かないのですかと横山先生に尋ねると、「この仲間はまだ日本では研究が進んでいなくて、名前が付かないのです」と答えられました。今日、ベニタケ属を研究されている大阪府立高校の先生が来ておられますから、紹介いたしますと仰って、上田俊穂先生を紹介していただきました。これが上田俊穂先生と私の最初の出会いです。上田先生は私の8歳上で38歳でした。「日本のベニタケ属はまだ3割程度しか分かっていなくて、この仲間の研究者は私以外日本にいないのです」と上田先生から伺い、それなら上田先生と一緒にこの仲間を調べようと決めました。この時から私のベニタケ属の研究が始まりました。その後、ベニタケ属のことをいろいろ教えて頂き、また、先生のもっておられる多くの図鑑を紹介して頂き、お持ちの参考文献もコピーさせて頂きました。上田先生との付き合いを2001年までとそれ以降に分けて述べたいと思います。

2. 2001年まで（先生の定年まで）

当初上田先生は高校の生物の先生であると思っていたのですが、大阪府立北野高校定時制の地学の先生でした。どうして生物でなくて地学なのですかと伺うと、地学の方が生物よりも実験が少なくて教えやすいと話されたように記憶しています。定時制高校に勤務されたのは昼間にきのこの研究ができるからだったようです。大阪府立大学農学部育種学研究室の卒業で、マツタケの研究で有名な衣川堅二郎先生の研究室です。大学院ではきのこの核について研究されていました。北野高校定時制に勤務しながら、滋賀大学の本郷次雄先生の研究室で研究されていましたが、知り合った頃はそれほど頻繁に滋賀大学に行っておられなかったようです。何年か後に府立島本高校に変わられ、地学だけでなく生物も担当されていたと思います。きのこに関してはもちろん生物学や地学に関して非常に造詣が深く博学で、穏やかな方で教え方も丁寧でした。その後、府立春日丘高校に転勤されて定年まで勤められました。私の勤務地が高槻市（府立高槻南高校）だったこともあり、先生のお宅に何度か伺ってきのこの標本やスケッチを見せていただきました。標本類は丁寧に整理されており、先生の几帳面さが窺えました。

最初に参加した近江神宮菌類観察会後、すぐに関西菌類談話会に入会しました。談話会の事務局は横山竜夫氏が勤められておられました。シンポジウムや講演会の内容は高度で学術的であり、きのこ同好会というよりも小さな学会のようでした。300名以上の会員が在籍しており、運営・企画・発送等が大変だと思いました。当時の会長は浜田稔先生で、その後、2000年まで京都大学の山本昌木先生、滋賀大学の本郷次雄先生、京都教育大学の土倉亮一先生、同志社女子大学の小原弘之先生、滋賀大学の横山和正先生が勤められました。上田先生は談話会の事務局を長年勤められ、会報の編集委員長も務められました。私は毎月の観察会や宿泊観察会に参加し、上田先生からベニタケ属のことをいろいろ教えていただきました。記憶に残っているのは京都府の丹後半島にある太鼓山

宿泊観察会です。浜田稔先生がまだお元気な時で、宿舎や電車の中で少し先生と話を交わした記憶があります。太鼓山観察会ではきのこは少なかったですが、夜に本郷先生や上田先生からきのこのスケッチの仕方等を教えて頂き、楽しく過ごしました。上田先生のスケッチは本郷先生と同様に緻密できれいでした。その後、大台ヶ原、朝日の森、奥伊吹、乗鞍高原、八ヶ岳、大山等（順不同）の宿泊観察会と一緒に参加しました。数年後に談話会の役員に推薦をしていただき、会の仕事を一緒にするようになり、丁寧に慎重な仕事ぶりに感心しました。

3. 2001年以降

上田俊穂先生は2001年に府立春日丘高校を退職され、再任用で3年勤務されて、その後2年間同校に勤められたと記憶しています。再任用終了後も勤務されたのは、春日丘高校の創立100年記念式典遂行に上田先生の力が必要であったためと伺っています。横山和正先生の後、上田俊穂先生は2001年から2005年まで4年間談話会の会長を勤められました。事務局および会長としての仕事ぶりは非常に几帳面で、正確でした。2005年頃から体の調子が思わしくなく、翌年に肺の手術をされたと記憶しています。

2008年7月の箕面公園菌類観察会の後、箕面駅前の喫茶店で上田俊穂先生、佐野悦三氏、後藤康雄氏、沖野登美雄氏、大藪崇司氏と私の6名で、日本のベニタケ科を解明するためにベニタケ研究会を立ち上げました。この会ではベニタケ属を中心とした毎年1回の宿泊観察会（チチタケ属を含める）を行い、インターネットで情報交換を行うことにしました。そのときの箕面公園菌類観察会を第1回ベニタケ研究会の例会としました。第2回は金沢の兼六園、第3回は長野県の飯綱高原、4回と5回を長野県の入笠山で行いました。現在の会員は26名になっています。2014年2月には三重大学生物資源学部で松田陽介先生のお世話で念願の第1回ベニタケ科特別講演・講演会を行いました。しかし、上田先生は病気等のために第1回観察会以降ベニタケ研究会に参加されませんでした。第3回飯綱高原観察会に2011年7月13日に行われた関西菌類談話会の箕面公園観察会で採集されたベニタケをパワーポイントにまとめたファイルを上田先生から送って頂きました。そして、その観察会で私が代理でその原稿を紹介致しました。

この原稿を資料1として最後に載せておきます。

4. 一緒に調べたベニタケ属

上田先生と一緒に新種記載や日本新産種報告ができませんでしたが、先生に教えて頂いたり、一緒に調べた種はたくさんあります（下記の種）。

アカハニセクロハツ (*Russula subnigricans* Type2 B-3)、キナコハツ (*R. ballouii*)、ウズゲツチイロタケ (ヨゴレハツ, *Multifurca ochricompacta*)、カンバベニタケ (*R. betularum*)、アシナガムラサキハツ (*R. gracilis*)、ウグイスハツ (*R. heterophylla*)、モリノドクベニタケ (*R. silvestris*)、リュウコクヒナベニタケ (*R. sp.*)、キツネハツ (*R. earlei*) などベニタケ属のきのこは子実体の形態的特徴の変異が大きく、形態的特徴だけで種識別をすることが難しいです。しかし、近年DNAの情報を用いることによって種間の違いが分かるようになってきました。そこで、上記の種のうち、アカハニセクロハツ、キナコハツ（仮称）、ウズゲツチイロタケ（ヨゴレハツ）の当時の観察状況とDNAに基づいた現在の研究状況に関して報告します。

(1) アカハニセクロハツ (*Russula subnigricans*; Type2 B-3; ニセクロハツ近縁種)

ニセクロハツは本郷次雄博士が1954年に日本特産の新種として発表された猛毒のベニタケです。ニセクロハツ、クロハツ、クロハツモドキ、コゲイロハツ、シロクロハツがクロハツ節に属しています。前者3種の識別はヒダの粗密、切断した時の変色性などから簡単だと思われていました。ニセクロハツはクロハツと同様に大型の子実体を有しており、ヒダの間隔が粗く、肉を切断したり、触ったりすると赤くなりますが、その後クロハツのように黒変しません。クロハツモドキはヒダが密であることが特徴で、肉を切断すると赤くなり黒変します。ニセクロハツに関しては上田先生（1989）が本郷次雄先生の滋賀大学退官記念誌「菌輪」でニセクロハツに近縁種が3種類ほどであると報告されています。また、子実体を切断すると赤変し黒変しないヒダが密なきのこが、Weberらの図鑑（1985）に*R. subnigricans*（ニセクロハツ）として掲載されていましたが、このきのこのヒダが密なので、ニセクロハツではないと仰っていました。上田先生からニセクロハツに類似種があることを伺っていました。しかし、ニセクロハツの特徴を示す種はニセクロハツだけであると思ひ込み、私も上田先生も観察会ではヒダが粗くて

切断しても赤いままのきのこをニセクロハツと固定していました。私は当時ニセクロハツに5系統(後日リボソーム DNA の情報から明らかになった)あるとは考え及びませんでした。

ニセクロハツに近縁種が数種あることが分かってきたのは、1996年頃からきのこの DNA を抽出して PCR 法で増幅し、シーケンサーで塩基配列を決定する分子生物学的手法を用いてベニタケ属を調べ始めてからです。ニセクロハツに5系統あることが分かりました(下野ら 2000, 2009; Shimono et al 2004, 2014; Goto ら 2005)。これらの5タイプのニセクロハツは発生場所、時期などの生態的特徴に違いがあります。5タイプ(Type 1~Type 5)をリボソーム DNA の ITS 領域および大サブユニットを用いてグループ分けした結果(B-1~B-5)を下記にまとめます(写真1~3と図1, 2)。

Type 1 (写真1, 図2のB-1): ニセクロハツ (本物)

西日本のシイ・カシ林に暑い時期、特に8月に短期間発生する。

Type 2 (写真2, 図2のB-3): アカハニセクロハツ

ヒダが赤いので多くの観察会ではニセクロハツとされている。日本全国のいろいろな林に長期間発生する。

Type 3 (写真3, 図2のB-2): ホソバニセクロハツ

ヒダが密で柄が長い、日本全国のいろいろな林に発生するが、発生数は少ない

Type 4 (図2のB-5): ニセクロハツダマシ (仮称)

胞子の表面構造がタイプ1(ニセクロハツ)に似る。東北地方だけ?

Type 5: (図2のB-4): ヌメリニセクロハツ (仮称)

子実体にぬめりがあり、発生数は少ない。関東、長野県?

5 Type のニセクロハツのうち、Type 1, Type 2, Type 3 の写真を下に示します。

Type 2 と Type 3 は郡山女子大学の広井 勝氏の撮影です。ニセクロハツ (Type 1) とアカハニセクロハツ (Type 2) のヒダの色、および子実体の変色性の違いは写真を見れば明らかに分かります。

上田先生 (1989) によってベニタケ属 1 と 2 として記録された種、ヒダの赤色の強いものが、下野ら (2000, 2004, 2009, 2014)、および Goto ら (2005) によるリボソーム DNA の解析結果からニセクロハツの B-3 系統、すなわち、アカハ

ニセクロハツ (Type 2, B-3, 写真 2) であることが分かりました。このことを2009年に鳥取大学で開催された第53回日本菌学会年次大会で上田先生らと連名で発表しました(下野ら, 2009)。その発表で用いた上田先生 (1989) が書かれた図、すなわち、ニセクロハツとベニタケ属 2 とベニタケ属 3 の胞子とカサの表皮構造を図 1 に示します。ニセクロハツ (図 1 の Type 1, 図 2 の B-1) の胞子は網目模様が多いですが、アカハニセクロハツ (図 1 の Type 2, 図 2 の B-3; 上田氏のベニタケ属 2) は単独の短いイボ状突起が多く、網目構造が少ないので、明らかに両者の胞子の表面構造の違いが分かります。両者のカサの表皮細胞にも違いがあります。

次にクロハツ節48種のリボソーム DNA の ITS 領域を最節約法で解析した系統樹(下野ら, 2014)を図 2 に示します。

図 2 より、リボソーム DNA の ITS 領域の解析によって *Russula densifolia* (クロハツモドキ) は *Russula adusta* (コゲイロハツ) を除くと 6 グループ (A-3~A-8), *Russula nigricans* (クロハツ) は 3 グループ (C-1~C-3), *R. subnigricans* (ニセクロハツ) は 5 グループ (B-1~B-5) に分けられました。

ここではニセクロハツグループに焦点を当てて述べます。ニセクロハツのタイプ標本が属するグループは B-1 にまとまり、クロハツグループ (C-1~C-3) とブートストラップ値73%で大群を形成しました。DNA ではニセクロハツ (B-1) はクロハツと近縁のようです。一方、アカハニセクロハツはブートストラップ値100%で B-3 にまとまり、B-2, および B-4 とブートストラップ値97%で大群を形成しました。B-5 は他のニセクロハツグループ、クロハツグループ、およびクロハツモドキグループとブートストラップ値50%以下で姉妹群を形成しました。ニセクロハツ (B-1, Type 1) は滋賀県、京都府、山口県、愛知県のカシ・シイ林に、特に関西では8月の非常に暑い時期に発生し、一方、アカハニセクロハツを含む B-3 (Type 2) は京都府、岡山県、三重県、福島県などの日本各地の林で夏から秋に採集されています。B-1 に属するニセクロハツの子実体の形態や赤変性(弱く、時間が経つと黒ずむ)等を検討すると、それらの形態はクロハツに似ています。そのためクロハツと間違っただけで食べられ中毒を起こすのではないかと思います。日本各地に発生す



写真1 Type 1 (本物のニセクロハツ)



写真2 Type 2 (アカハニセクロハツ)

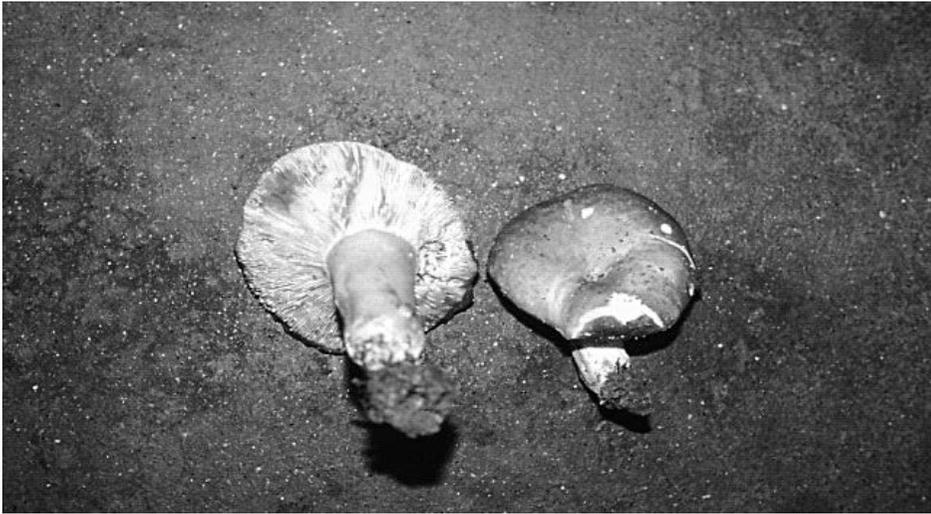


写真3 Type 3 (ホソバニセクロハツ)

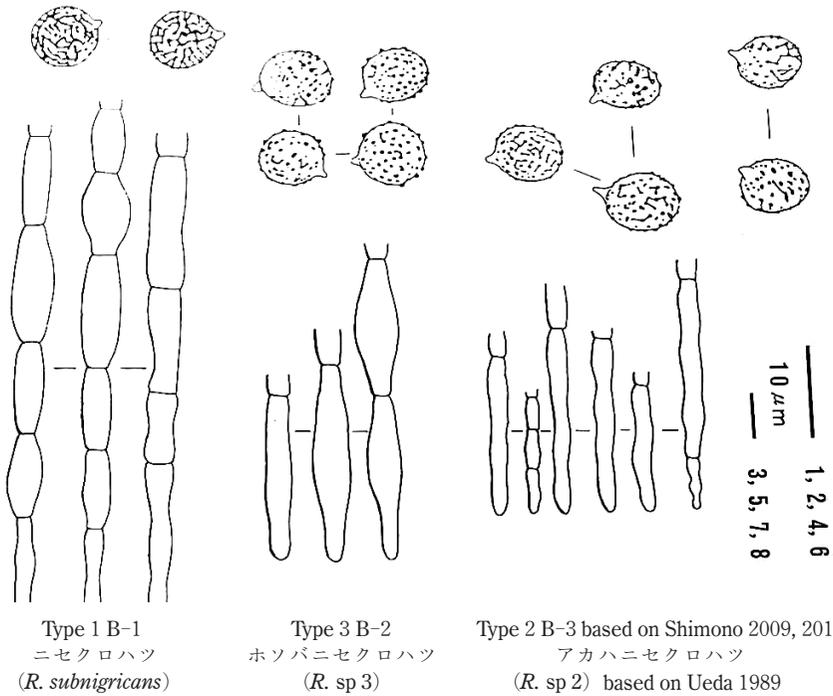


図1 ニセクロハツおよびその近縁種の胞子の表面構造およびかさ表皮の細胞 (上田, 菌輪)

るヒダが赤く赤変性の強いニセクロハツとされているものはアカハニセクロハツだと推測されます。

これらの結果から、今までニセクロハツとされていたものには5系統あり、それぞれ別種として記載する必要があることが分かりました。ニセクロハツとその近縁種が解明され、新種記載等の報

告できる環境がやっと整いましたが、上田先生がお亡くなりになり、一緒に報告する機会が失われてしまったことは残念で仕方ありません。

(2) ウズゲツチイロタケ (ヨゴレハツ) ; *Multifurca ochricompacta* (Bills & O.K. Mill.) Buyck & V. Hofstetter
 このきのこは今から20年前の1993年9月5日に

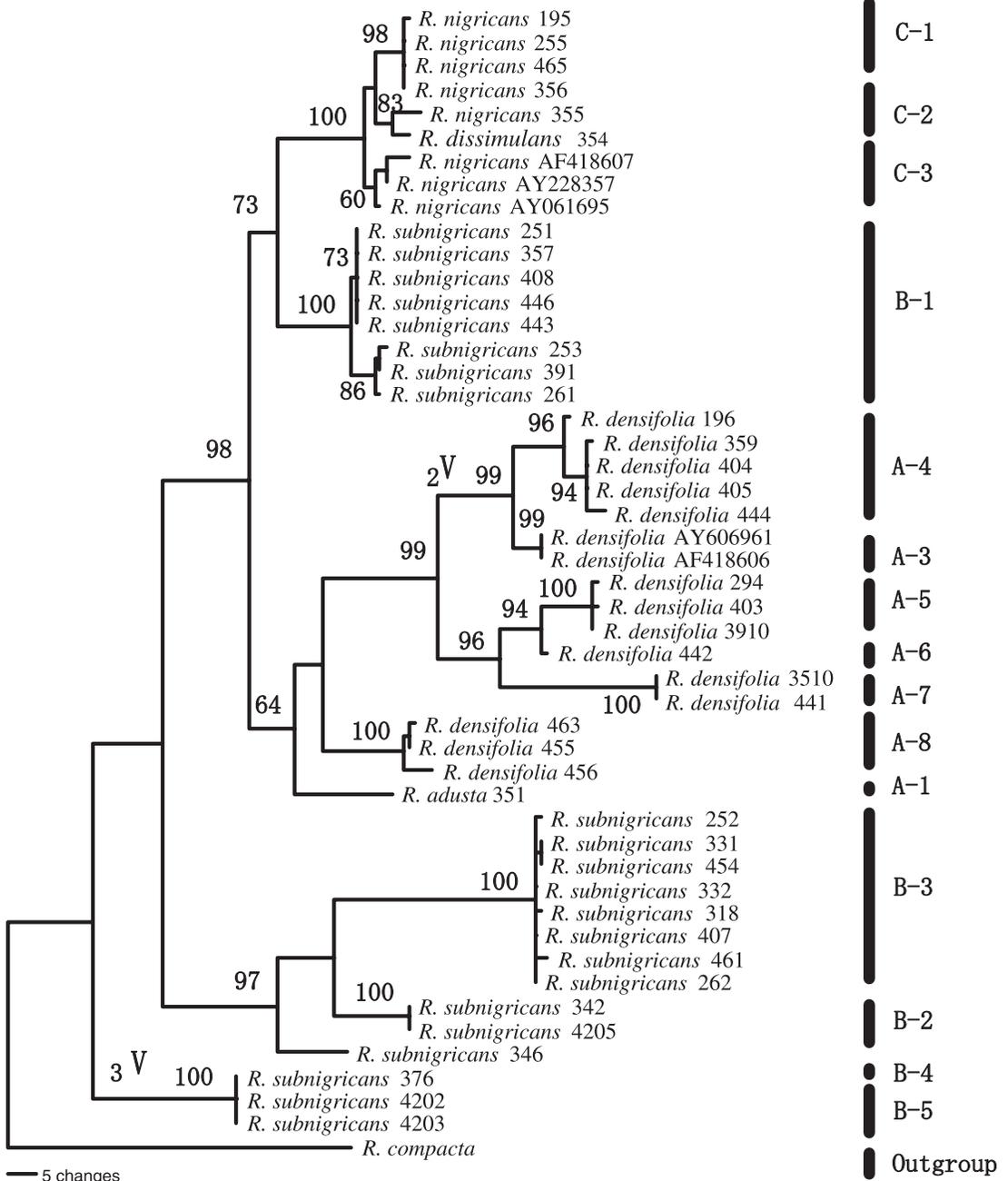


図2 クロハツ節48種と外群1種のリボソーム DNA の ITS 領域を最節約法 (MP) で処理をした系統樹 (下野ら, 2014). Constant index (CI) = 0.6571; retention index (RI) = 0.9036. Percent bootstrap support (1000 replications) equal to or more than 60% is shown above the nodes. The symbol (2 V) shows the deletion found between sites 224 and 245 in *Russula densifolia* (A-3 and A-4). The symbol (3 V) shows the insertion found between sites 172 and 177 in *R. subnigricans* (B-5)

行われた関西菌類談話会の六甲山奥池菌類観察会 (世話人丸本龍二氏) で上田先生と一緒に1個体採集しました (写真4)。カサが汚れた白色で、ヒダは橙を帯びた汚黄色で2から3回二又に分かれていました。汚くて白い、ヒダが黄色で2から

3回二又分枝する特徴的なベニタケだったのでヨゴレハツと二人で名付け、半分ずつ持って帰りました。しばらくして上田先生からこのきのこの名前が分かったとの連絡がありました。テキサスのきのこ (1992) に *Russula ochricompacta* として掲



写真4 六甲山奥池菌類観察会で採集したウズゲツチイロタケ (ヨゴレハツ)

載されているとのことでした。このきのこは、アメリカの南西バーアジニアの山岳地帯から得られた2標本をもとに Bills & Miller (1984) によって、チチタケ属からベニタケ属へ1984年に移されました。さらに、2008年には Buyck ら (2008) によって、巨視的および顕微鏡的特徴、リボソーム DNA の ITS 領域・大サブユニット、および RBP2 の情報を用いた DNA 解析から、新属 *Multifurca* (ウズゲツチイロタケ) 属 (*Lactarius furcatus* と *R. ochricompacta* を含む) が提唱されました。

六甲山奥池菌類観察会で採集した以降、このきのこを見る機会に恵まれませんでした。池田良幸先生が北陸のきのこ図鑑 (2005) でウズゲツチイロタケとして報告された2005年頃から、各地でこのきのこが報告され始めました。私は2009年8月22日に岡山自然保護センターで得た個体から DNA を採取し、この種の DNA の情報を得ています。このきのこは青木実氏が日本きのこ図版 (2008) でニオイシロハツ、大分きのこ会 (2010) ではキヒダシロハツの名前で記録されています。(3) キナコハツ (ウコンクサハツ; 宮内, ウスキハツタケ, ウスキハツ; 青木): *Russula ballouii* Peck

このきのこも今から20数年前から気になってい

ました。ウコンハツにかサや柄の色がよく似ているのですが、かサはウコンハツほど鮮やかな橙色でなくて淡く、柄もかサと同様に、下部だけが細かい粒点を持った淡い橙色でした。このきのこが観察会で採集されたとき、上田先生といつもいじけたウコンハツですねと話をしていました。最初に採集した年を忘れましたが、9月の談話会のコナラの多い林での菌類観察会だと記憶しています。当初はこのきのこはコナラ林からだけ発生すると考えていたのですが、長野県の飯綱高原や広島県のアカマツの混ざった雑木林から発生しますので、コナラと関係はあると思いますが、それほど強くないように思います。交野市の府民の森「くろんど園地」(スイレン池周辺)、「ほしだ園地」や交野森林公園のコナラの多い林でも採集をしています。このきのこの素性が分かってきたのはやはりリボソーム DNA を用いて研究を始めてからです。2004年にリボソーム DNA の大サブユニットを用いた論文 (下野ら2004) でウコンハツとは近縁でないことが分かりました。しかし、子実体の特徴や胞子の表面構造を調べたりしていたのですが、なかなか種同定ができませんでした。新潟県のきのこ (2010年) にこのきのこの写真があり、長岡科学大学の宮内信之助先生がウコンクサハツとして記載されていました。そこで、北ア



写真5 交野市星田園地で採集したキノコハツ
20101017

メリカきのこ図鑑 (Phillips, 1991) やテキサスのきのこ (1992) を調べ直し、このきのこが *R. ballouii* であることを確認しました。

リボソーム DNA に基づく解析 (下野, 2004) ではこのきのこはウコンハツに近縁ではなく、クサハツ (クサハツ節) にも近縁でないので、宮内信之助氏 (2010) によって提唱されたウコンクサハツという和名は誤解を招きやすく、適切でないと思います。青木実氏 (2005) はウスキハツタケと記載しており、別の記載ではウスキハツとしています。

ウスキハツタケはチチタケ属のハツタケを連想しますので、同様に適切な名前と思えません。それよりもウスキハツの方がベニタケ属の和名として適していると思います。キノコハツの方がカサや柄下部の色の雰囲気をよく表していると思います。

おわりに

今回報告した3種以外に関しても多くの思い出があり、それらのベニタケの名前を見ると上田俊

穂先生との当時のやりとりが目に浮かびます。これらの新種記載や日本新産種報告がいつの日かできればと思っています。上田俊穂先生、長い間ベニタケのことを多く教えていただき、ありがとうございました。

謝辞

関西菌類談話会での上田俊穂先生の経歴に関して多くの事柄を教えて頂いた衣田雅人氏、および、多くのベニタケの標本を収集して頂いた後藤康彦氏、標本および顕微鏡写真を提供して頂いた広井 勝氏、DNA 研究の指導をして頂いた三重大学教授高松 進先生に感謝いたします。

引用文献

- 青木 実・日本きのこ同好会, 名部みち代編.
2008. 日本のきのこ図版V. 日本きのこ同好会2, 神戸市, 795 pp
- 池田良幸. 2005. 北陸きのこ図鑑. 橋本確文堂, 金沢, 394 pp
- 上田俊穂. 1989. ニセクロハツに似た2, 3のきのこについて. 本郷次雄教授退官記念誌 菌輪. 33-39
- 大分きのこ会. 2010. 大分と九州のきのこ. 大分きのこ会30周年記念誌. 86 pp
- Bills, G. and Miller O.K. Jr. 1984. Southern Appalachian *Russulas*. 1. Mycologia 76: 975-1002.
- Buyck, B., Hofstetter, V., Eberhardt, U., Verbeken, A. and Kauff, F. 2008. Walking the thin line between *Russula* and *Lactarius*: the dilemma of *Russula* subsect. *Ochricompectae*. Fungal Diversity 28: 15-40
- Goto, Y., Ando, Y., Maruyama, K., Sasaki, H., Masai, T., Orihara, T., Shimono, Y., Fukihar, T., Osaku, K. 2005. Poisonous mushrooms in Japan: their taxonomy, toxicology and folklore. Proceedings of the MSA/MSJ joint meeting 2005, p 117, Hilo, Hawaii, USA, Aug. 2005.
- Melzter, S., Melzer, V., Miller, O.; Scientific Advisor 1992. Texas Mushrooms. A field Guide. Univ. of Texas, Austin, 350 pp
- 新潟きのこ同好会. 2010. 新潟県のきのこ. 新潟日報社, 新潟市, 159 pp
- Phillips R. 1991. Mushrooms of North America. Little Brown, Hong Kong, 319 pp
- 下野義人・高松 進・大木 理. 2000. リボソ-

ム DNA の ITS 領域に基づくニセクロハツとその近縁種の同定. 第44回日本菌学会奈良大会 講演要旨集. 43 p

Shimono, Y., Hiroi, M., Takamatsu, T. 2004. Molecular phylogeny of *Russulaceae* (Basidiomycetes; Russulales) inferred from the nucleotide sequences of nuclear large subunit rDNA. *Mycoscience* 45: 303-316

下野義人・広井 勝・上田俊穂・後藤康彦・高松進. 2009. ニセクロハツには5型ある. 第53回日本菌学会鳥取大会 講演要旨集. 41 p

下野義人. 2014. 上田俊穂先生と思い出深いベニ

タケの過去・現在. 2014年度関西菌類談話会講演会 要旨集

Shimono, Y., Hiroi, M., Takamatsu, T. 2014. The phylogeny of *Russula* section *Compactae* inferred from the nucleotide sequences of the rDNA large subunit and ITS regions. *The Bull. Graduate School of Bioresources Mie Univ.* No. 40: 65-75

Weber, N.S., Smith, A.H. 1985. *A Field Guide to Southern Mushrooms.* The Univ. of Michigan Press. 280 pp

(2014年3月3日受付)

資料1 ベニタケ研究会飯綱高原観察会で下野が代読した上田先生作成のファイル

箕面公園のベニタケ属

上田俊穂

上田さんのコメント-1

- 2011年7月13日の大阪府箕面公園の *Russula* を紹介します。

箕面公園は箕面川の両岸をおおう照葉樹林の真っ只中にあります。主な樹種はコジイとアラカシで、リョウブ・ソヨゴ・アカマツなども混じります。谷筋にはイロハモミジ・ケヤキなどがあります。尾根筋にはかつてはアカマツが多くありましたが、現在は少なくなっています。

上田さんのコメント-2

- この日は湿っていたものの、夏のきのこはまだ少なく、例年多いイグチ類、テングタケ類、ベニタケ類は少なかったです。写真を写した場所が晴天下の森の中でしたので、緑色をつよく帯びた写真になりました。それを修正しましたので、影に色がついてしまいました。カレバハツもありましたが写真は省略します。

採集したベニタケ

- 大阪府箕面市箕面公園
- 2011年7月13日採集のベニタケ属
- 5種類
カワリハツタケ ムラサキカスリタケ
キチャハツ *R.sp 1* *R.sp 2*

箕面公園の林

カシ、シイ林



カワリハツタケ



ムラサキカスリタケ



キチャハツ



Russula sp 1



Russula sp 2



上田先生の思い出

富山県中央植物園 橋屋 誠

私の机の中には、上田先生からいただいた硫酸鉄(Ⅱ)の結晶があります。ご存知のとおり、ベニタケ属の観察では硫酸鉄(Ⅱ)が欠かせません。この結晶は談話会の観察会後に先生からいただいたもので、それまで私は少量の硫酸鉄(Ⅱ)を目薬瓶の中に入れて持ち歩いていましたが、観察会になるとまず試薬を溶く水を探さねばならず、大きな体でウロウロと探す姿を、先生は見かねられたのだと思います。

上田先生は長岡京市にお住まいで、ここは私の実家も近かったことからきのこだけでなくいろいろな事を教えていただきました。私は植物園に勤める少し前から、地域の植物同好の方と、出身地である京都乙訓地域の植物フロラを調べていました。この調査結果は後に「乙訓地域の植物目録(1999)」と「京都西山の自然(2002)」として発表しましたが、この調査の際にアゼオトギリの存

在を教えていただいたのも上田先生でした。アゼオトギリは絶滅危惧Ⅰ類にランクされているなど全国的にも珍しい種類です。このアゼオトギリは車が通るような道端の田の畦や水路際に生育しており、植物好きな者でもよほど注意していないと見過ごすような場所でした。先生はきのこだけでなく、様々な生き物が好きでした。上田先生のイメージには自転車で風を切りながら走っておられる姿がありますが、先生は気になった場所で自転車を止め、そこに見られる生き物を注意深く観察されていたのだと思います。

先に書いた硫酸鉄(Ⅱ)の結晶を入れた筒に巻かれた紙には、「…では適当にがんばって下さい。」と書かれています。これも上田先生のお人柄で、今も私の横で励ましをいただいている気がしています。

(2014年3月3日受付)

上田先生を偲んで…

出合 文子

上田先生から頂いたメールと一緒に思い出した時の思い出は沢山ありますが、このメールが私にとっては一番です。メールは亡くなられた年の初めに頂き、まだお元気なご様子が浮かびます。個人的なお名前もありますが、そのまま全文を掲載し、おちゃめだった上田先生を偲びたいと思います。

出合さん、写真有難うございました。

今日は昨日よりいい天候で、私は朝から蒲団を干しています。かみさんは姉たちと宝塚歌劇へ。

さて、ヒメカイメンタケですが、なつかしい思い出があります。ちょっと書かせてください。

私がきのこに興味を持った高校生のとき、自宅



上田先生のメールに添付されていたヒメカイメンタケの画像

(京都の東九条) から歩いて伏見稲荷や泉涌寺へよく行きました。泉涌寺の奥には御陵があって立入り禁止になっています。しかし誰も居ないので柵を乗り越え御陵に入りきのこを探したものです。

あるときアカマツの根元に、茶色の小さな蜂の巣のような形のきのこがあり、小躍りして持ち帰りました。早速保育社の原色日本菌類図鑑で「絵合わせ」をしましたが、見当たりませんでした。その頃、あつかましくも京大農学部の浜田先生の所へときどきお邪魔させていただき、採集したきのこを見てもらっていました。本郷先生も、ときたまおいでになるということで、運がよければお目にかかれるということでした。

その蜂の巣のようなきのこは、結局、不明のま

までした。浜田先生は、「こういうきのこは今関さんでないと…」とおっしゃったように思います。(そのころ、大学院の博士課程に萩本さんが居られました)

そのきのこの名前が判ったのは1964年、大学を出て教師になった年に「続原色日本菌類図鑑」が発行されてからでした。

その後、このきのこにはなかなかお目にかかれませんが、図鑑によれば「稀」なんだそうですね。出合さんの写真のおかげで若かった頃を思い出しました。ありがとうございました。

上田俊穂 2013/1/31

(2014年3月29日 受付)

上田先生との思い出

橋本 貴美子

今から12年程前に毒きのこ図鑑(日本の毒きのこ、学研)を作るという話が持ち上がり、毒成分や中毒症状の部分の執筆を担当して欲しい旨のお手紙を上田先生からいただいた。当時面識もない私のところへどうしてだろう?と思ったが、談話会に入会して7~8年過ぎていたため、幽霊会員でも専門をご存知だったのかもしれない。図鑑の内容のやりとりは主にメールで行ったため、当時埼玉県に住んでいた私は、共同執筆者の顔を全く知らないまま図鑑は完成した。ところが縁あって、10年程前に京都で勤務することになり初めてお会いすることとなった。当時の私の研究テーマの一つが、ニセクロハツの毒成分の構造を決めることであった。傷つけると赤く変色する“それらしいきのこ”を関東各地で集めては保存したり、毒性を調べたりしていたが、本郷先生の絵とびったり一致するものがみつからず困っていた。上田先生にお聞きすると、清水山の発生場所(ここに発生するものがホロタイプ)に案内してくださるという。円山公園から知恩院の大鐘の脇を通り、椎の林の中を登っていくと発生場所にたどり着く。更に登り、東山山頂公園を経て清水寺へ降りるルートを教えていただいた。昔このあたりは庶

民の送葬地で、オニフスベかと思って近づくとしゃれこうべだった…などと怖い話をされた。この時以来、この場所を通る度に、いつかしゃれこうべを見つけてしまうのではないかと恐れている。ニセクロハツの発生場所を教えていただき、本物を見て、これまで採集していたものはすべて偽物ということがわかった。何種類集めたのかもよくわからなかった。ただ、清水山でも、本当に一種類だろうか?と思う程、本郷先生の絵とは異なる個体がある。クロハツの仲間のきのこは、容顔の幅が広い上に、発生後に容顔がかなり変化するという特徴があるらしい。こんなまぎらわしいきのこをどうやって見分けたら良いのか?とお聞きしたところ、後日に形態の記載シート(次ページ)をくださった。当時は、きのこ全体で何種類くらいあるのかも知らず、グッ!こんなにいろいろなことを書いておこなきゃならないのか!というのが素直な感想であった。この後、談話会の皆さんの協力のおかげで、本物のニセクロハツをたくさん採集することができるようになり、毒成分を解明することができた。

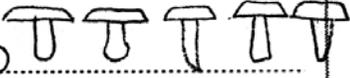
上記の図鑑の中に“生食は禁物”というコラムを書いた。コラムの題目を決めたのは上田先生で

No. _____
 和名・学名 (判らないときは空欄) _____

 同定者 _____
 ● 採集地 (なるべく詳しく) _____ 県 _____ 郡・市 _____ 町・村 _____
 _____ 高度 _____ m
 ● 発生場所の環境、周りの植物 _____

 ● 傘の特徴
 直径 _____ cm, 形と色: 若いもの _____
 古いもの _____
表皮のめくれやすさ _____, 変色性 _____
 傘の肉 (実質) : 中央部での厚さ _____ cm, 色 _____
臭い _____, 味 _____
変色性 _____, 乳液の有無・色・変色性・味 _____

試薬による呈色反応 $FeSO_4 aq.$
 $Pn-Mon-A$
 ● ひだの特徴
幅 _____ mm, 厚さ _____, 縁の形状 
分叉, 脈絡等の有無 _____
 周縁 1 cmあたりの褶 (L) と小褶 (l) の枚数: L = _____, l = _____
色 _____, 変色性 _____
 柄に接する部分の状態: 垂生 直生 弯生 上生 離生 隔生など _____
試薬による呈色反応 _____

 ● 柄の特徴
長さ ふとさ _____, 形 
表面の色や状態 _____
内部の状態 _____
内部の色 _____
変色性 _____
根元の状態 _____
試薬による呈色反応
 (木質の表面) _____
その他の特徴 _____

周辺から中央に向かって半径の1/2まであらず。

○で囲んだものはとくに必要です。

はないかと思うのだが、上田先生のシイタケ中毒事件が元なのではないかと勝手に想像している。ある日曜日、上田先生は寝坊をして起きてきた。奥様が朝ご飯を温めてくれたが、みそ汁に刻んだシイタケが浮いていて、どうも火が通っていないというのを見てわかった。しかし、遅く起きてきたという引け目があって、黙って食べた。その結果、一日中下痢で動けなかったというものである。事情をわかっている者が人体実験をしてみたということになる。きのこの中にはさまざまな消化酵素が含まれているため（きのこには口がないので、体の外に酵素を出して、分解したものを食べている）、加熱して酵素を変質させておかないと、このようなことが起こることが多いのだと思う（もちろん、酵素だけではなくて低分子の物質が原因のこともある）。シイタケを生で食べると中毒するということを自信をもって話せるのは、

上田先生にこの体験談をお聞きしたからである。

毒きのこに関してもう一つ実験の話がある。モエギアミアシグチの毒性試験である。このきのこは食べると幻覚を引き起こすと言われているが、その真偽の程が怪しい。ひょっとすると外国種は毒性をもつのかもかもしれないが、日本のきのこはどうか、みつかる上田先生と一緒に実験してみた。今回は30g、次回は50gと量を増やし、持ち帰って好きに料理して食べてみた。生で食べると他の中毒（下痢など）を起こしそうなので、必ず加熱（バター炒めが標準）して食べてみて、夜中にメールで様子を聞いてみた。しかし、これまで中毒を起こしたことは二人共になく、美味しいきのこであった。生食の実験をすべきか、上田先生がいなくなってしまった今、独りで考え中である。

(2014年4月4日受付)

上田俊穂先生ありがとうございました

奥 沢 康 正

思い起こせば先生との出会いのキノコ道をたどれば、幼菌の会からホンゴス会、関西菌類談話会、植物園でのきのこ展と、長くて短い道のりをいつもやさしくていねいに教えられながら、共に自然道を歩む人生でした。先生は私の大阪医大での恩師であった上田厳夫（生化学教授）の伯父にあたられ、先生の御家系が古くより医系に深かったこと、さらに私は教養課程2年間を京都府立大学農学部にて在籍したこともあり、先生は大阪府立大学卒業となにか不思議な親近感を憶えたものでした。先生が茨木市の府立春日丘高校勤務時、廃棄処分される古い救急時の木製担架ほか保健室の廃棄備品、生物教室の小動物骨格標本、多数の古い生物の年代別教科書などを学校までレンタカーでいただきに上がり、今も私設の眼科・外科歴史博物館に一部展示しています。特に御自宅で大切に保存しておられた上田家伝来の江戸期の鹿肋骨を利用した指圧道具のめずらしい医療用具を寄贈していただき、私設の博物館にいまも展示しています。

菌類分類学に関しては長野県での数回の関西菌類談話会合宿の「キノコに関心を持つなら、人があまり関心のない深く研究されていない領域を探索してみても」と先生と本郷先生の的確なアドバイスのにより、毒菌類に関心を持ち、医学史の分野でもある毒菌類史に関心を持つこととなりました。「きのこの語源・方言」を手始めに、「毒きのこ今昔」を各々10余年フィールドでの探索と共に机上での文献資料を調べ出版することとなりました。足掛け20数年、その間先生からは多くのアドバイスをいただき、さらに日本ペンクラブ会員として書き物と旅行好きから、その後虫生菌への転身までは私の診療所にたびたび自転車で気軽に来訪していただき、菌類・生物学の講義を聴き、やがて雑談へと花が咲きました。時には先生の日常での生物クラブの教師としての教育の難しさ、生物クラブの生徒が受験よりもきのこ採集に熱心になる余り、父兄からクレームをつけられ、結果退部、残念ながら菌類研究者として大成しなかった苦い経験、クラブの部長時生徒の山岳事故があ

り、教師としての責任感と保護者に対する自責の念と心痛を吐露され、晩年自らの病と対決され多くの経験から教育者としてのすばらしい体験談をお聞きました。本当に懐かしい思い出です。先生は真の教育者として、患者としての苦しみを一言も吐露することなく飄々と達観された生き方を愚生に示されました。

追伸：自分史となりますが愚生は15年間冬虫夏草菌を含め、菌類民俗学への関心が高まり、己の生きざまを何らかの形で書き遺すことを生きがい

とし、小さな世界に閉じこもり中、先生と同様大病を患いましたが、自然を愛するきのこの仲間たちにささえられ、本当に幸せな自然史の書き物人生を送ってきたと思っています。そのうち黄泉の国に行けば、俊穂先生、吉見先生、本郷先生と3人の師匠に再びお会い出来ることを楽しみに、残された時間をきのこの道からはずれた私の本来の趣味、医学史に没頭しています。

合掌

(2014年4月23日受付)

高校生からの葉書

萩本 宏 (菌楽者)

京都大学の応用植物学研究室（現在の大学院生命科学研究所統合生命科学専攻環境応答制御学講座分子代謝制御学分野）には、旧制と新制の大学院生や研修員が大勢いたので、居室や実験室が不足していた。それで、濱田稔先生の部屋にも衣川堅二郎、古川久彦の両先生が同居されていた。私は1957年4月に大学院に進んだ際に、信州大学に赴任されて空いていた古川先生の机と椅子をあてがわれた。濱田先生の席とは、本箱や戸棚で仕切られていたので、お姿を拝することはなかったが、先生がおられるときは緊張した。ちなみに、関西菌類談話会発足当初の事務は、先生のご指導のもとにこの机上で行った。

ある日、先生は「高校生から質問がきているので、君、返事しておいてくれ」と仰って1枚の葉書を渡された。質問は「原形質流動はなぜ起こるのですか」という趣旨のものであった。高校生は、原形質流動を教わって、或いは観察してより多くのことを知りたくなったのであろう。院生でもそう易々と質問できなかつた先生に質問状を送るとはたいした熱意と度胸だと感心した。しかし、返書の執筆は容易ではなかった。

私は、原形質流動の機構については、当時の植物生理学の教科書程度の知識しかなかった。それに、大学院では卒論研究とは別の課題をいただき、その研究と文献調査に忙殺されていた。従って、原形質流動に関する最新の論文を読んで返事

するような余裕はまったくなかった。私は、記憶が詳らかでないが、「流動の機構は分からないが、細胞内の物質輸送に関係しているのではないか」という返書を認めたのではないかと思う。

その機構は、今でこそ岩波生物学辞典第5版(2013)にもかなり詳しく記述されているが、質問から6～7年後の1964年に刊行された第1版第2刷ですら殆ど触れられていなかった。高校の教科書では、今でも私の返事の水準である。私の返事が高校生の期待に副えなかったことは想像に難くない。そのうえ、院生からの返事でさぞがっかりした事と思う。

私は、この高校生がなぜ濱田先生に質問してきたのか不思議であった。当時、原形質流動の研究といえば、大阪大学理学部の神谷宣郎教授一門の独壇場だったから、たとえ先生の弟子の院生が返事しても私の返事よりもはるかに内容のあるものであったと思う。私は、高校生が知っていた唯一人の大学の先生が濱田先生だったのだらうと勝手に解釈した。

それから半世紀近くたって、ご無沙汰していた関西菌類談話会に再び出席させていただくようになった。ある時、上田俊穂先生から「昔、萩本さんから私の質問に対する返事をいただきましたが、覚えておられますか。その葉書は今も残してあります」と言われた。「あの時の高校生」とすぐに思い出したが、まさに冷や汗であった。それから

十数年、上田先生は誠に惜しいことに早々と逝かれた。先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

なお、上田先生の談話会会長やきのこ展の責任者としての緻密な計画の立案と円滑な運営には瞠目すべきものがあったが、どなたかが触れて下さ

ることと思う。また、ご著書の『きのこ図鑑』（保育社、1985）に感銘をうけたが、この事は別の機会に譲りたい。

(2014年5月25日受付)

上田俊穂先生を偲んで

鎌田 佐代子（関西菌類談話会会員）

2010/1/16（土）。1通のメールが届く。「あなたはカゴタケの観察記を関西菌類談話会の会報に投稿しますね」とほぼ断定している内容に面食らう。その「会報」がどんなものか見たこともないのだから。でも、しばらくして私はドキドキワクワクしてきた。「ナンダカ、スゴイメールガキタミタイ」。

メールの主は、私を持ち歩いている本の著者だ。その本は勤めていた中学校の廃棄図書、古くて真っ黒になっていた。2年前の夏、図書室整備をしたとき、どの図書委員もその本を見ると迷わず「捨てる」方の机に分類したものだ。それを自分のものにして時々眺めていた。見開きの白いページに説明がある。欄外の絵が美しかった。きのこのことはあまりわからないのだが、ラテン語の意味を読むのも未知の世界を覗き見るようで好奇心をそそられた。もっとおもしろいのは巻末の「きのこの話」だった。そこにもきれいな図が描かれていた。きのこについてとても具体的に書かれているのだが、写真の撮り方、乾燥の方法、料理法まで、具体的であればあるほど私には奇妙な話に感じられた。

一番興味をそそられたのは「毒キノコとキノコの毒」の章だ。『どんなによい香りがしても、おいしそうに見えても、それだけで食べられると判断してはならない。筆者のひとり上田が高校生のころ、京都市のシイ・カシ林で、白い大型のキノコを採集した。種名も属名もわからないまま、非常においしそうな香りがしたので一家そろって吸い物にしてたべてしまった。さいわい中毒はしなかったが、後になって本郷先生にスケッチと記載をお見せしたところ即座に「シロオニタケにごく近縁の *Amanita*（テングタケ属）のキノコです」

と言われ早まったことをしたと冷や汗がでたことがある。』（「検索入門きのこ図鑑」p 203）

これを読んで、のけぞったものだ。あまりに強烈な印象だった。

（この白いキノコを食べた人が私にメールをくださったっている！）はやる心を抑えながらお返事をしたのが、上田先生との出会いだった。何も知らなかったの（知らないというのは恐ろしいことだと今思うが）、図々しくも、先生がご指導くださるなら観察記を書きます、というようなやりとりをした。私が持っている図鑑の写真を添付すると「それは古い版だから、新しいのをあげましょう」と言われる。（まだ会ったこともない方から本をもらうなんて図々しすぎる）とは思ったが、欲しい気持ちの方が圧倒的に強かったので「下さい！」とお返事すると、2日後に新しい本が届いた。

後々、その本にサインしていただいた。だから、私は2冊の「検索入門きのこ図鑑」を持っている。きのこ図鑑はいろいろなものを購入したが、今でも私は「検索入門きのこ図鑑」が一番好きだ。

その後、キノコの世界に一步進もうと早めに退職したことは正解だったと、いつも思う。だが、私のフィールドである南港の埋め立て地の林を歩きながら、時々泣きたくなる。上田先生がメールで「そこにはカラムラサキハツが出るかもしれませんね。」（出ました！）「ユーカリの下にはおもしろいものが見つかるかもしれません。半地下性菌です。」（まだ、見つけていません。）などとヒントを下さったことを思い出す。（なぜ、もっと先生にお近づきになって教えてもらわなかったかなあ。）そのことに気づくのが遅かったことが悔やまれてならない。こう書いていて、やはり泣き

たくなる。

カゴタケには、その後会えない。上田先生は「また、いつか、ですね。」と言われた。

だから、私は、私のフィールドを歩き続けま
す。(合掌)

(2014年5月27日受付)

上田俊穂先生に講師をお願いしました

シニア自然大学校菌類研究会 平澤 一 男

はじめに

約10年前のことです。誕生したばかりの“シニア自然大学菌類研究会”のきのこ観察、きのこ講座の講師をお願いしました。滋賀大学の横山和正教授のご紹介もあって、快く引き受けていただきました。

それから、お亡くなりになる少し前までの約10年間、講師をしていただき、会員から絶大な信頼がありました。途中、ご病気が判明し体調をくずされておられるなかでも、可能な限りの教授をしていただきました。この数年間は、私の車を足として使っていただくことが多くなりました。なお、先生の映像記録(ビデオ)は講師第1回目～最終となってしまった昨年6月2日の生駒山きのこ観察会まで残しています。

やさしく、謙虚で、その上時折ユーモアを交えての人柄など、模範にさせていただくことばかりです。50年以上も菌類にたずさわり、その知識と前向きな姿は会の発展に大いに寄与したと思います。長い間のご指導、ありがとうございました。

きのこの木彫り

先生からきのこの木彫りをしませんかと言われ学習テーマにしたことがあります。材料のシラカバ、桜の枝、などを前から準備していただき、木彫りを教えていただきました。今も玄関にその時に作成した「ベニテングタケ」などの作品を飾っています。その後も木彫り講習をしてほしいという要望が出ていましたが、実現できませんでした。

合宿きのこ観察会

信州きのこ観察会(2010年9月)同行、ペンション「きのこ」に宿泊、高原のきのこ観察。

大山きのこ観察会(2011年10月)、同行、ブナ林

のきのこ、ツキヨタケの光る様子観察。

遠方にかかわらず、同定指導をしていただきました。

クリタケモドキ

個人的ですが、京都小塩山で「クリタケモドキ」らしいきのこを見付け(2010年11月)、以後毎年同時期に観察してきました。アカマツの枯れた立木に生えていましたが、クリタケと区別がつきませんでした。そこで、上田先生に同行をお願いして観察(2012年11月)していただきました。詳しい調査が必要とのことで、サンプルは小寺祐三先生に委ねられました。小寺先生は「生のサンプルが必要です」と言われたので2013年11月に同行をお願いしサンプルを採集しました。3日間の顕微鏡観察等の結果、「クリタケモドキ」ではなく、アカマツの枯れ木に生えた「クリタケ」と同定していただきました。上田先生が亡くなったあとのことでした。小寺先生はこれで上田先生に約束したことを果たせたと言われました。上田先生、小寺先生、ありがとうございました。

北海道旅行

○2008年7月

上田先生のご紹介で、北海道の上川きのこの会の佐藤清吉会長を私と家内で訪れました。佐藤さんは私たちのために“きのこ観察会を準備して下さい、赤岳銀仙台からの登山案内もしていただきました。この時に初めて観察した「タコアシタケ」(日本新産種)の事は今でも忘れられません。あとで分かったのですが、上田先生は以前に講師として佐藤会長から招かれたことがあるとのことでした。



図1 日本新産種「タコアシタケ」



図2 観察会后、佐藤会長のお宅で

○2009年7月

上田先生の体調が回復するのを待って第2回目の北海道行きにお誘いしました。

フェリーを使い、道内は私の車で移動しました。メンバーは上田先生ご夫妻と私と家内でした。

一緒に登った北海道最高峰「旭岳」2,290 mのことは忘れられない思い出になりました。先生は「登りがきつい」とおっしゃっていましたが、無事に登頂されました。

次の日、上川町池田屋旅館に泊まり、佐藤会長の計らいで「きのこ観察会」に加わることが出来ました。大雨でしたが、大雪山のきのこを観察出来、楽しい思い出になりました。

佐藤会長から「きのこを学ぼうとしたら“顕微

鏡観察”が必要ですよとのアドバイスを受けました。

阿寒湖温泉では、夕食に「毛ガニ」の料理をいただきました。お酒が好きな上田先生は甲羅の中にお酒をついで美味しそうに飲んでいたのが、今でも忘れられません。楽しい時間をありがとうございました。

おわりに

長いようで短かった上田先生とのかかわり、書けば切りがありません。上田先生とご家族にお会いできて幸せでした。これからも、思い出を糧にして生きたいと思えます。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(2014年5月27日受付)

上田先生の思い出 2011年5月2日

小 寺 祐 三

京都府南丹市美山町へ6人のメンバーでコゴミ採りときのご観察、クリンソウ観察など沢山のスケジュールを企画して1台の車で出かけました。集合場所である地下鉄国際会館駅前を9時に出発、花背峠から広河原を進み、やがて佐々里峠のアップダウンを過ぎると間もなく美山地区へと入ります。2時間近くを走行してようやく美山町田歌に到着、早速河原に下りてコゴミ採集をしました。時期的に少し早かったようですが、何とかそれなりに収穫があり、帰路は京北町方面に向かっ

て進みました。途中、眺望が素晴らしい無人の休憩所に立ち寄り前年に発見した子囊菌「テンガイカブリタケ」を探していたところ、5個体が見つかりました。大変珍しいきのこで上田先生も喜んでおられました。

この後、京北町から灰屋の林道へ入り、ヒメアジロガサモドキやフクロシトネタケなどを観察、楽しい一日を過ごしました。翌年も上田先生は楽しみにしておられましたが、あいにくご体調が優れず、「また来年に行きましょう」ということに



美山町の河原でヨゴミを採集中の上田先生ご夫妻



テンガイカブリタケ



クリンソウを撮影される上田先生



京都府美山町「かやぶきの里」で風景を撮影される上田先生、左から3人目

なりましたが、ついに実現しませんでした。岩石や植物、そして昆虫にも大変興味をお持ちで、沢山のことを教えていただきました。清水山で採集したベニタケが私の検鏡写真をみていただいて「ススケイボベニタケ」(上田仮称)であると同定していただいたことも大変嬉しかった思い出です。今でもベニタケを観るたびに「上田先生、これ何でしょうか？」と話しかけてしまいます。2013年8月末、病室で私と家内の手を力いっぱい握られ、無言のままじっと目を見つめられていた様子が脳裏に焼きついています。心からご冥福をお祈りいたします。

(2014年5月28日受付)

上田俊穂先生の思い出

西 田 富士夫

昭和44～48年、私は滋賀大学に在籍していて、その時に本郷次雄先生と出会いました。先生の愛車スバル360に乗せていただいて、大学近隣のキノコ採集などによく連れて行ってもらうようになっていました。しかし、当時の私はキノコにはあまり興味が湧かず、高等植物の生態や分類の方が好きでした。本郷先生に『馬糞上に生えるキノコ』の卒業論文の指導をしていただいたにも関わらず、その後は岡山大学大学院で雑草学を学ぶことにしたのです。そして、昭和50年4月から実家の京都に戻り大阪府立の高等学校へ生物学の教員として勤務することになりました。当時、滋賀県の小・中学校の教員になっていた友人たちと毎月植物の観察に出かけていました。そんな中、京都や滋賀県の山で多くのキノコに出会い、教えを請おうと採集品を持参して本郷先生を訪ねる事が何回かありました。その時です！本郷先生から「大阪の高校の先生になったのですね。大阪の高校にはきのこにとっても詳しい先生がおられますよ…」と上田俊穂先生の名前を覚えていただいたのです。そして関西菌類談話会にも加入させていただくことになったのです。入会して何回か行事に参加した時だったように記憶しているのですが、上田先生からフレンドリーにお声をかけていただき、どんな内容だったかは忘れましたがとても居心地がよくなったことを思い出します。私からの「このキノコ何でしょう？似た種とどのへんが違うのでしょうか？」の問いかけには、奢らず、丁寧に、時にユーモアも混じえて答えてくださいました。おおらかな優しい性格の持ち主だなと感じました。同じ大阪府立の高校教員ということもあってか、親近感を覚えたものでした。談話会の合宿で一緒に散策した時に、数種類について「この植物何？」と聞かれたことがあり、シラタマホシクサ、ウリノキ…などとそれに答えることで、やっと少しばかりだけでも今までの恩にお返しができたような気がしました。

あるとき、「西田さん！関西菌類談話会の会計監査を引き受けてくれない？年に一度だけ会計担当者とお会って、ちゃんと会計処理されているか

みて、そして総会で『監査した結果、正しく処理されていると認めます』と言ってくれるだけでいいねん！」と談話会の役員の一になるように誘われました。「えー！？」と思ったのは確かですが『上田先生からのお声掛けなら』とお引き受けることにしました。2～3年後、「事務局の発送係やってくれない？西田さんなら高校教師だから印刷機も自由に使えるだろうし…」ということで、先生が勤めてられた春日丘高校まで車で行き、彼が管理していた印鑑や書類等一式を引き継いだのでした。先生は関西菌類談話会会長やきのご展実行委員長などを歴任されて、ますますお忙しくなっていかれたように記憶しています。今になって思えば、会のことをしっかり考えて手配りをしてられたのだなあと感じています。

お亡くなりになる数年前、「西田さん！よく海外旅行してられるんやてね？！僕はまだ行ったことがないねん！」と声をかけてこられました。よくよくお聞きすると、仕事の関係で娘さんやお孫さん達がマレーシアのクアラルンプールに行っておられるので訪問したいとのことでした。初めての海外旅行ということで、かなり不安になっておられる様子がよく伝わってきました。パスポート取得の方法や航空券のお得な買い方などをお話ししながら「もしよろしければ、クアラルンプールまでご一緒しましょうか？娘さんとお会いになられたら、そこで別行動するというので…」と申し入れたりもしました。先生とお会いする度にそんな会話が何回か交わされていたのですが、思いがけず体調を崩され、また娘さんたちも帰国されたとのことで、海外旅行の話は途切れてしまいました。

亡くなられる直前の菌類講座ではシスチジアのお話を聞かせていただきました。まだまだもっともっとご活躍いただきたいかったです。上田先生には見習うべきことがたくさんあります。時に触れて思い出し、精進したいと思っています。ご冥福をお祈りします。

(2014年5月30日受付)

上田俊穂先生の思い出

岩瀬剛二

私が、大学院博士課程を中退して宝酒造に入社し、マツタケの研究を始めたのが1981年5月、すぐに日本菌学会の新潟大会があり、参加したのを覚えています。大学院では植物生理学を専攻していたため、菌類の研究を行うのは初めて…ということで、確か、すぐに本郷先生が会長をしておられた関西菌類談話会にも入会し（直接のきっかけは発酵研におられた横山竜夫博士に誘われてだったかと思いますが）、当時は小原先生がお世話しておられ同志社女子大学のデントン館で行われていたシンポジウム、吉見先生がお世話され田中神社で年末に行われていたスライド大会にも参加するようになりました。そうすると、必然的に上田俊穂先生とも出会い、ほぼ毎回の会合などでお話をする機会が増えていきました。もともとの専門が生理学であったため、きのこの世界でも分類にはあまり真面目に取り組むこともなかった私は、

上田先生ときのこについて深く話をするということはありませんでしたが、談話会そして本郷先生がご存命中に開催されていたHONGOS会でもお会いすることが多くなっていきました。私は、2006年8月に長年住み慣れた関西を離れ、鳥取（鳥取大学）、東京（帝京科学大学）で生活している間に、本郷先生、吉見先生、そして上田先生までもが亡くなられてしまいました。関西を離れても上田先生との関係はきのこ展での恒例の上田先生がデザインされたたてぬぐいの大量購入（20～30枚）で結ばれていました。談話会の行事へも参加せず、ほとんど関西に戻ることもない年月が続いていたにも関わらず、上田先生からは毎年のように手ぬぐい購入の案内を送っていただいて購入し、海外を訪問したり、海外からのお客様を迎えた際のお土産として利用させていただいております。それが、いつのころからか案内が途絶え、



1987年12月12日 本郷先生宅で撮影された写真、一番左側が上田俊穂先生

「ひょっとすると」と思っていましたら、昨年の訃報に接することになってしまいました。何年度のきのこ展の手ぬぐいが上田先生デザインの最後の手ぬぐいだったのか…整理する暇もなく、原稿締切日を迎えてしまい、あわてて昔の写真を探していましたら、おそらく持っている人も少ないだろうと思えるものが出てきましたので、それを上田先生の思い出の写真としてお送りすることに

いたしました。1987年12月12日、本郷先生宅で撮影されたもので、写っている8名中亡くなられた方と存命の方が半分ずつという写真です。まだお若くて元気だったころの上田先生の笑顔がよいのでこの写真にいたしました。上田先生を初め亡くなられた方々が懐かしく思い出されます。上田先生のご冥福を心からお祈りいたします。合掌。

(2014年5月31日受付)

上田俊穂さんから寄せられたナガエノスギタケ情報とヒミズ標本

相 良 直 彦

ナガエノスギタケの発生地点を、その発見者による現地案内なしに特定するのは大変むずかしい。しかし中には、紙面に記された情報によって特定できた場合がある。故上田俊穂さんから寄せられたものがその最たる例である。現地は車道から遠い、標高770mの急峻な尾根の上。ここでは、上田さんから頂いた手紙をそのまま画像として次頁以下に再現させていただく。この手紙は、私が頂戴した情報の中でもっとも懇切丁寧・詳細なもので、そこには、上田さんのお人柄や描写力もよく表れていると思う。なお、この手紙の公開については、ご遺族(奥様)の同意をいただいている。

上田さんがナガエノスギタケに遭遇した滋賀県高島市朽木地区については、本会や幼菌の会の方々のお陰で、これまでにナガエノスギタケ発生地点が計12カ所特定された。うち、上田さん、西田富士夫さんおよび正井俊郎さんが見つけた3例はミズラモグラの営巣地だと判った。そして正井さん分(旧「朝日の森」、標高260m)では、ミズラモグラ個体も捕獲できた(滋賀県許可)。これらの成果は、「滋賀県朽木におけるミズラモグラの存在、とくに低標高の地における生息について」という論文にまとめ、日本哺乳学会発行『哺乳類科学』に採用されて第48巻、31-38頁に掲載された(2008年6月、私とお3人の連名)。この論文の原稿作成過程では、上田さんに地図の作成をお願いした。寄せられた情報を論文という形に生かすことができたのは大変さいわいであって、私は安堵した。

上田さんからはヒミズ(哺乳類、食虫目モグラ科)の標本も頂いた。路上死体を拾得して液浸したもので、5点ある。1986年8月18日奈良県大台ヶ原で得たもの2点、1991年10月9日比良山麓で得たもの1点、1999年11月6日比良山正面谷で得たもの1点、2005年11月15日長岡京市浄土谷で得たもの1点、である。これらの標本を届けてくださった理由は、たぶん私が、「モグラ類の死体を見つけたら拾ってきて欲しい」と集会で呼びかけたからであったと思う。京都府美山町芦生においてナガエノスギタケからミズラモグラの巣に出会ったけれども、モグラ本体は捕まらない。「ミズラモグラの巣」は、抜け落ちていた体毛による判断であった。そこで、このモグラの存在証拠の収集につとめたのである。当時近畿地方ではミズラモグラの存在証拠はきわめて僅かで、京都府下では初めての証拠が、左京区八丁平での死体拾得にもとづいて報告されようとしているところであった。

死体を持ち帰り、液浸標本をつくるのはけっこう面倒である。悪臭にとまどうこともある。にもかかわらず、上記の日付からわかるように、一過的ではなく持続的に協力してくださった。頂いた標本が直接に私の研究に役立つことはなかったけれども、それぞれ収納番号が付けられて京都大学総合博物館に保管されている。

上田さんは静かに私の研究に力をかしてくださっていたと受け止めている。

No. 1
Date 5 NOV 99

相良 先生

前略お許し下さい

FAXでは手紙が表現できず申し訳ないで郵便でお送りします。
同封の地図の赤丸の範囲内の登山路のそばで、私の腕時計についているいかりを高度計で750mでした。
±50mの精度です。

さてE-mailに書かれたとおり、朽生のトンネルにある朽生橋を渡って左折した所に^{のせ}自動車を置いて、道を北にとりまわると、ほどなく白倉岩への登山口が右手に見えてきます。山道はわかりやすく登りも下りも苦痛だと思いません。(私は下りに利用しましたが、登りに利用する方が楽だと思います)
さて、登山口には白い立標がありましたが、目的地まであと2本ありました。(合計3本)、高度750mくらいのとこに上りに向って左手にこのおなじ白い立標があらわれた。ここから



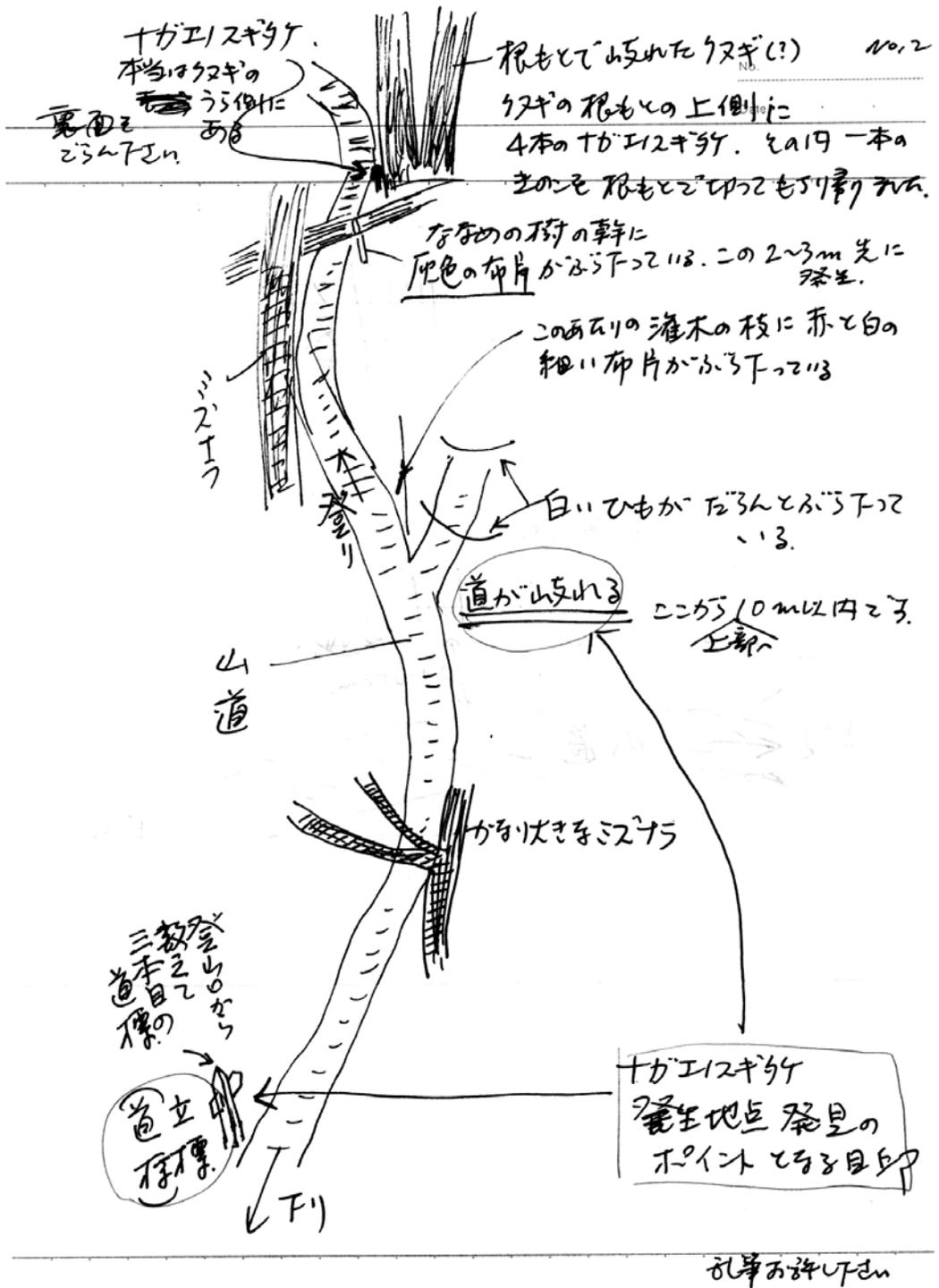
約1.5時間ほかかかっています。
ここからあと30m程度です
(別紙をどうぞ見てください)

山道はわかりやすく、テープや布片などが多いため探すのは大変です。合点もほとんどありません。

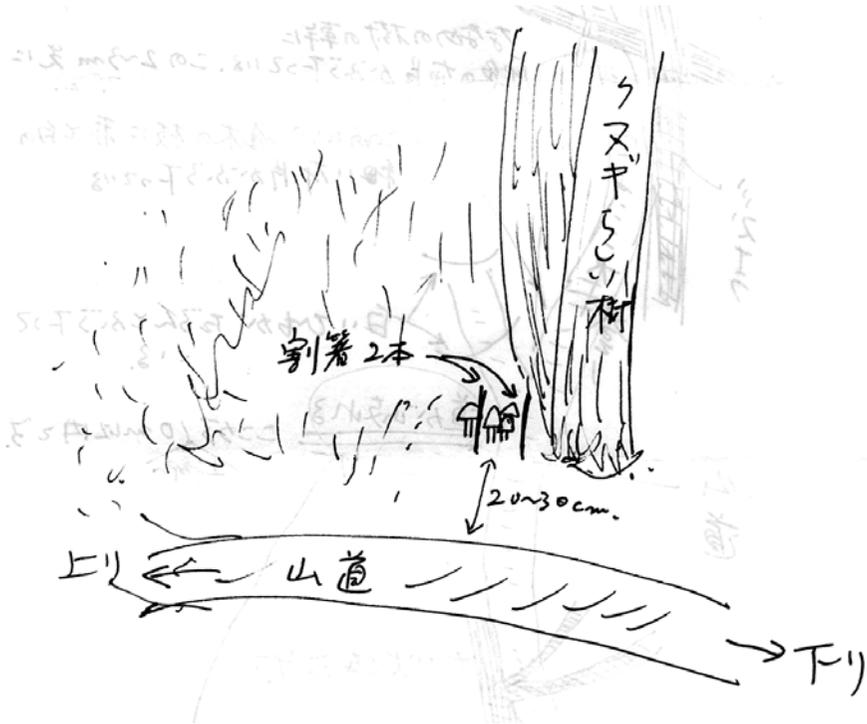
たがエスキマ祭見日は1999年11月3日です。

乱筆乱文を不許し下さいませ。敬白

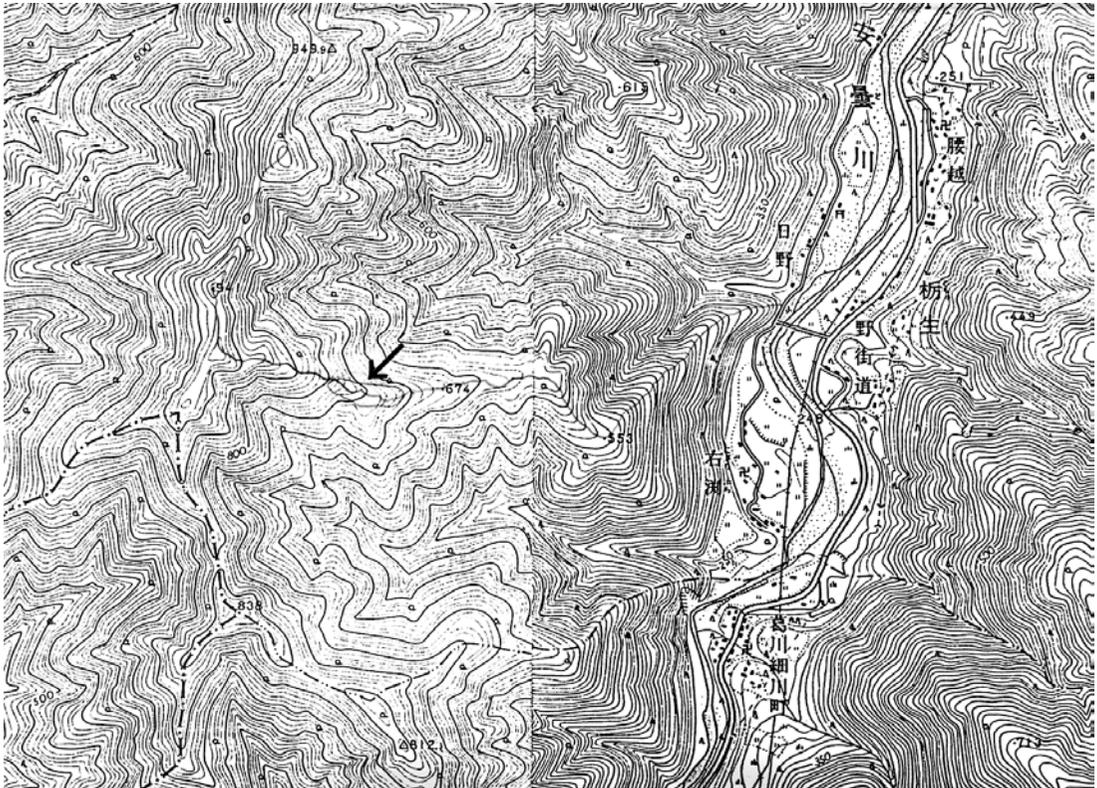
上田 俊徳



上田さんからの手紙 第2頁.



上田さんからの手紙 第2頁の裏面（おもて面の筆跡が透けて見える）。



上田さんの手紙に添えられた地図。登山路が蛍光塗料で示され、矢印のところが赤線で囲まれている。

(2014年5月31日受付)

上田俊穂先生ご指導ありがとうございました

北河内自然愛好会 田中光彦

上田先生が亡くなられたとの知らせを出合文子氏及び本会会長の西畑氏から受けました。きけばまだ72歳とのこと、以前から御病気のことは聞いていましたがこんなにも早く逝かれるとは思っていませんでした。2012年秋の、京都府立植物園における定例の「きのこ展」でお会いしたのが先生との最後となりました。北河内自然愛好会としては、その年の6月16日に、出合文子氏と橋本貴美子先生にお世話を願って京都薬科大学の薬用植物園の見学を有志を募って行いましたが、その時上田先生もご一緒に参加されていました。その時、これまでのきのこ観察会でお会いした時と比べてずいぶんお身体が小さくなったように見えたことが強く印象に残りました。

北河内自然愛好会は1985年に発足し、動物・植物・昆虫・野鳥・地質・海岸生物など幅広い分野を対象に活動を始めましたが、その年の11月に第5回例会として上田先生を講師にお招きしてキノコ観察会が行われました。その時は私はまだ会員ではなかったけれども参加しています。それ以来2009年10月までの25年間、ずっと上田先生に講師をお願いしてキノコ観察会を実施してきました。その間の観察会はずっと天野史郎会員の担当でした。

また上田先生には会の顧問にもなっただき、多くの助言・ご支援をいただきました。長いあいだ本当にありがとうございました。

例会の中でキノコ観察会がいつも最も参加者が

多く人気があったのは、やはり上田先生の人柄によるものだと思います。多くのエピソードを交え、ユーモアたっぷりの解説は判りやすく、みんなその時は良くわかったつもりで満足して帰路についたものでした。そのうち何人かはキノコの魅力にひかれて大きなキノコ図鑑を買い込んだりしていたようです。

私もキノコの胞子紋の作り方を教えていただいた、やってみたらきれいなものができて大変うれしかったことを覚えています。また上田先生は地質の方がご専門だったとも聞いていて、一緒に歩きながら少し変わった色の岩石があると質問し、いろいろと教えていただいたことも思い出の一つです。毎夏の行事である大阪市立自然史博物館の同定会に植物標本を持って出かけると、キノコ担当の上田先生が、同定ポイントをおさえていない素人のキノコの写真を手にされて、困った顔をされながら、それでも同定依頼者に、真面目で真摯な態度で説明されているお姿をよく見かけました。大変だろうなあ、と思いながら横から眺めていたものです。博物館に佐久間先生が来られるまでの話です。その後のことは知りません。

思い出を書き出せばきりがありません。ともあれこのような素晴らしい先生に指導をうけた本会は幸運であったと思います。長い間ご指導ありがとうございました。合掌

(2014年6月3日受付)

大阪市立自然史博物館の菌類コレクションと上田俊穂先生

大阪市立自然史博物館 佐久間 大 輔

私が最初に上田先生にお会いしたのは、他の京都近辺の大学院生の例に漏れず、学生時代にきのこをやるのであれば関西菌類談話会に参加してみるといい、と誘われてのことでした。榎原神宮が最初だったかと思います。けっして参加率の良い学生ではなかったが、乗鞍高原の合宿などでやっぱりきのこ難しいなあと思っていた頃に手ほどきを頂いた一人が面倒見の良い上田先生でした。

間をはしょりますが、1996年私が大阪市立自然史博物館へ就職してから再び色々とお世話になりました。それはけっして関西菌類談話会の場だけではありませんでした。その頃、大阪の博物館に収蔵されていたきのこ標本は1200点。その大半は上田先生の同定によるものでした。それは上田さんと博物館との長い交流の蓄積です。私が入った時は学校業務が忙しいこともあり、上田先生は博物館友の会で監査役に退いていらっしゃいましたが、それ以前には観察会などを企画する評議員をされており、講師としてキノコ観察会を実施していました。そうした機会の標本や特に気になる標本を博物館へ収めて頂いていたようです。現在で

は私の就職後、上田先生からたくさんの寄贈をいただいたこともあり、仲介を頂いた本郷先生のコレクションも合わせその全貌は1万3千点を越えるほどになりました。

上田先生は博物館友の会の会報 Nature Study にも13編の記事を寄せています。1964年に書かれた「キノコ その研究のしかた」は記録のとり方から細胞学までを扱った力が入ったものですが、一番はじめ、1960年に同誌に寄せたのはなんと「貝化石と高師小僧の産地紹介」。自宅のすぐそばの産地の記録でした。1972年の記事は森本養菌園の訪問記です。箕面公園や箕面の松林のキノコ記録は談話会会報同様、大阪の菌類相の貴重な記録です。上田さんは他にも大阪各地の自然観察団体で講師をつとめられ、貴重な記録を会報などに残していらっしゃいます。

上田さんは「夏休みの最後を告げる恒例の」標本同定会講師を毎年勤めていました。私が就職してからも、同定会だけはよろしく、とお願いしてきて頂いていました。同定に際してのスタンスに始まり、着眼点など私にとっても吸収できるとこ

表1 大阪市立自然史博物館友の会会報 Nature Study に上田俊穂氏が執筆した記事

発表年	記 事 の 題 名
1960	雑記帳；貝化石と高師小僧の産地紹介
1964	キノコ その研究のしかた
1965	キノコの切手
1965	キノコ 一胞子のできかた一
1968	きのこ採集案内
1968	ふしぎなキノコの話
1969	アメーバの採集と飼育
1972	マッシュルームの栽培園をたずねて
1975	根尾谷水鳥断層の危機一門外漢による根尾谷断層見物記
1982	ウスキモリノカサの胞子紋
1982	ジュニア会員のページ；きのこの胞子
1982	友の会「きのこ観察会」で発見された箕面公園のきのこ
1989	観察会「マツ林のキノコ」報告



図1 2011年3月25日 本郷先生宅にて

ろがたくさんあったからです。もとより上田さんはキノコだけにとどまらずナチュラルリスタ的な幅の広い興味をお持ちでもあったので、大阪市立自然史博物館での交流を大事にして頂いていたように思います。いつも標本同定会にこられるときには、単に講師としてでなく、コケや鳥の羽や植物、また時には岩石など、知りたいものを幾つかお持ちになり、合間を縫って他の講師や学芸員に尋ねるのが常でした。そして昆虫のアマチュアや若手研究者もきのこを持って上田先生と私のブースにやってきます。そんな中には貴重な氷ノ山のキイロスッポンタケの記録があったり、当時京大の修士で枯死材のキノコを研究し始めた深澤遊さんなどもいました。そしてこうした記録も *Nature Study* に載せられたり、深澤さんの論文の成果になったりしています。そして、毎年この同定会を目指してやってくる荒尾さんなどの常連の方もおられ、みなさんとキノコ談義を交わす場にもなっていました。

最後に、大阪市立自然史博物館のコレクションと上田先生の間を語る上で、外せないのが本郷次雄先生のコレクションを大阪市立自然史博物館へと収蔵するきっかけを作っていただいたことです。本郷先生の標本は *Hongo Herbarium* として



図2 2011年3月25日 本郷先生宅にて

論文に引用されてきた日本の菌類研究上の重要標本ですが、本郷先生が滋賀大学を引退時に自宅へと移され、その際に特に重要なタイプ標本は国立科学博物館へと寄贈されたのですが、その他の標本は本郷先生がお亡くなりになるまで維持され、さらに積み重ねられていきました。本郷先生の死後、ご遺族がその管理を上田先生に相談されたのがきっかけで、大阪市立自然史博物館への寄贈を紹介いただいたわけです。家族にも信用の厚い上田先生ならばこそ、つないでいただけたのではないかと思います。標本の寄贈後も、本郷先生の所蔵文献目録などを作っておられました。その結果をしっかりと聞きすることができなかったのが悔やまれます。吉見昭一先生の標本も国立科学博物館への寄贈に際しての標本整理を献身的に行われていました。残った標本群についても、心配をされていました。その後、関連資料とともに大阪市立自然史博物館で収蔵することになると、喜んでいただきました。

大阪各地でキノコの観察会でお世話になった、といろんな人から上田先生の話をお聞きします。博物館にいと先生が関わっておられた高校生物教育研究会の関係者とも接することから、その関わりの広さ、そして愛された上田先生の人柄を常に感じます。いろいろな影響を与え、でもけっして押し付けるところのない。そして重要な役割をしっかりと担っておられた上田先生は大阪のナチュラルリストにとって、生態系の要を担うキーストーンのような存在だったように思います。真似ができるとは決して思いませんが、頑張って役割を少しでも引き継いでいきたいと思います。

(2014年5月28日受付)

上田先生の思い出

田中久美子

あれは2004年4月の顕微鏡観察会での事。終わりに間際だったか、上田先生がある物を取り出された。矢印型の木に金属のワッシャーが嵌っていた。

「金属のワッシャーの穴より大きな木が通っていて、木のどこにも継ぎ目はない。さて、どうやってこうなったのでしょうか。」

先生の問いかけに 皆さん うーんと考え込んだ。

「木が小さいうちに輪っかを嵌めて大きくなるのを待った。」

まず思いつきそうなことを言ってみたが、後が続かない。会はそのまゝ解散したが、私はこの謎を解きたい、絶対自分でも作ってみたいとその時、決意したのであった。

一ヶ月後の日記を見ると、試行錯誤の末、再現してみました。とある。木は土産物のパッケージの安物の桐箱を使い、金属ワッシャーはホームセンターで買った。と。矢印の木を彫るだけで3個ほど失敗したが、なんとか2個成功した。と。でもやっぱりああだこうだ考えてそれに沿って作っていく過程が楽しい。失敗して行き詰まっても突然ぱっと道が開けたり。出来たらやっぱりうれしい。とも書いてある。上田先生の狙いもそのあたりだったのかな。

その次上田先生にお会いしたときに成功したものをとお見せすると、「杉板でも作れますよ。」のアドバイスを頂いた。

丸山健一郎さんにも出来た矢印ワッシャーを見せると、丸山さんがこう言った。「キノコ型を作ってみたいな、ツボがあってワッシャーをつばに見立てて…」そのアイデア乗った！頂き！

それからは、キノコを彫った。安物の桐箱は素麺の空箱など。杉板は蒲鉾板。夢中になってキノコを彫り続けた。

失敗したものもあったが、大小いくつものキノコパズルが完成したので、丸山さんや自然史博物館の佐久間さんに差し上げるとともに上田先生には箱詰めにしてお送りした。

幾日か経った頃、上田先生から箱が送り返されてきた。

「あれ？ なんで？」と思って箱を開けてみた

ら、な、なんと、そこには上田先生によって綺麗に削り整えられ美しく彩色されたキノコパズル達が…。タマゴタケが特に素晴らしい。カサの条線が一本一本丁寧に描き込まれ、柄のささくれ模様も。ワッシャーに上田先生作の木ボールイグチのアクセサリーも。なんかすごいご褒美を頂いたようで、感謝感激、身に余る光栄！上田先生とのコラボ作品だー！と舞い上がってしまった。もちろんこれらは我が家の家宝！実際、自然史博物館友の会の”私のお宝展”にも出品させて頂いた。

そして、このキノコパズルをきっかけに上田先生と親しくお話させて頂けるようになった。パズルの作り方については、小寺さんがまだ思案中でいらしたので、「考えている人がいる間は作り方は伏せておきましょうね。」と上田先生とお約束して、それはずいぶん長い間守られる事となった。

パズラー仲間と認知されたのか、上田先生が「いい本があるから貸してあげましょう。」と言ってお貸し下さったのは2冊のパズルの本だった。その著者の芦ヶ原伸之さんが私が小学生の頃、夢中で取り組んだプラパズルの企画デザインをやった人だと知り、その2冊の本も楽しく読ませて頂いた。

たまたま、近所の店でその芦ヶ原さん監修の「ウメボシパズル」を見つけた。これは上田先生にプレゼントしなくちゃと思い、その次の総会の折、バレンタインも近いということでチョコレートを添えて差し上げた。すると上田先生は「うわあ、



図1 タマゴタケが旺巻。矢印パズルにもニス仕上げが



図2 送り返されてきたのは色とりどりのキノコパズル



図4 コラボ第2弾?! マツタケ手拭の三角袋とナップザック



図3 小さなビーズで作った変形菌グッズ 変形菌に似たキノコ、アカツブタケ、キカイガラタケのアクセサリー 極め付けは木彫キノコ

ウメボシパズル! これは以前どこかで見かけたけど難しそうなので敬遠していたのに…」とおっしゃった。

とは言え、一ヶ月も経った頃、ウメボシパズルのお礼と称して長封筒をぶ厚くしたような紙箱が送られてきた。はたしてその中味は ①2mm玉程の小さな瑠璃色のビーズに、テグスで柄を付け木の表面に植え込んだ変形菌グッズ。②変形菌に似たキノコーアカツブタケ? ③キカイガラタケで作ったアクセサリー、そして極め付けは④奇麗に彫り上げられたキノコのアクセサリー!

参りました。恐れ入りました。なんと茶目っ気たっぷりなラインアップ! 誠実だけど堅物じゃない上田先生のお人柄が滲み出ている。特に、ビーズで作られた変形菌グッズは、作っていらっしゃる姿を想像しただけでも微笑ましい。うれしくなってしまう。後日、同じ物を伊沢正名さんにも差し上げていらしたので、実は自信作でらしたのかも! 大雑把な私とは違い先生の作品は緻密で完成度が高い。キノコの彫り物など、どうしたらこんなに滑らかに仕上げられるのかと思う程。ああ、

又、家宝が増えた。

負けじというわけではないが、今度は上田先生デザインのマツタケ手ぬぐいで何かグッズを作ることにした。とりあえずは袋物、三角袋とナップザック。三角袋は上田先生に差し上げることが出来たが、ナップザックの方は試作と違って、上田先生用に丈夫でちょっと凝った裏布を捜してはまだ出来ず、お渡しすることが出来なかった。

思えば自然史フェスティバルの報告に大阪変形菌おっかけ隊のことを書いてくださったり、ご自身が指導なさっているシニア菌類研究会で「体験談でもいいですから気楽に。」と変形菌講座をするように勧めて下さったり。いつもお心遣い頂いていた。講座の話を受けた時は、そういう経験もなく最初はとまどったけれど、結局、実物を見て知ってもらおうと、科博から変形体を分けてもらって、原形質流動を見てもらう事と標本を出来るだけ見て頂けるよう準備し、無事終える事ができた。いい経験をさせてもらったと、今でも感謝している。

入院中の先生からお手紙を頂いたのは2013年7月始め。きのこ仲間の人が見つけた物が変形菌かどうか調べて欲しいという依頼であった。博物館へ行って検鏡したところ、残念ながらそれは変形菌ではなく、キノコの分生子のようだった。その旨の報告と、丁度、先生にお見せしたいと思っていた、よく出来たポップアップ本があったのでその本を一緒にお送りした。入用ならばお持ち下さい。入らなかつたら、この次お会いした時にでもお返し下さい。と書いて…

その本が送り返されてきた日付が8月25日。

「筋力低下で妻に代筆で文章を書いてもらってまず。」とあって絶句した。一通手紙を書く準備をしていたのに、どういう言葉を添えていいやらわからず当惑しているわずか20日後、訃報を目にすることになった。

談話会の野外観察会にも、もっと参加しておけば良かった。もっとキノコの事を教わっとけば良かった。心残りは山積みだ。

マツタケ手拭のデザインは力強くて大好きだ。浴衣でも企画してもらって着てみたいくらい。幸

い手元には10数枚のマツタケ手拭が残っている。法被かアロハが作れないかと思ひ巡らせる。マツタケ手拭グッズを作りながら先生を偲びたいと思う。

先生どうか安らかに。そして天から見て、こいつ行き詰ってるなと思ったら、どうか“ヒラメキ”を授けてください。

“さようなら”を言うにはまだ名残惜しい。

(2014年6月16日受付)

福島県内で見られるニセクロハツ類似きのこについて

郡山女子大学 広井 勝

上田さんがお亡くなりになり、何かおもいでになることを書いていただけないかと、下野さんからメールをいただいた。忙しさにまぎれてつい時が過ぎてしまったのですが、ニセクロハツ類似きのこについて色々ご教示をいただいたので、以前に日本菌学会東北支部会報第20号に載せた内容を紹介させていただく。

ニセクロハツはクロハツ節に属するベニタケ科のきのこで、この科のきのこで唯一猛毒きのことして知られており、関西では死亡例もある¹⁾。このきのこは関西特産のきのこことされていたが、「原色日本新菌類図鑑」²⁾では関東以西、「日本のきのこ」³⁾では新潟や仙台でも発生が認められていると記載されている。このきのこは無毒のクロハツに似たきのこであるが、子実体を傷つけた時の変色(赤みがかかるが黒変しない)が異なる。しかしながら、このような変色を示すきのこが関西には2, 3種存在することを上田⁴⁾は既に報告していた。私も既に福島県にも上田の指摘するきのこ同様のニセクロハツ類似きのこが存在することを報告してきた⁵⁾。不思議なことにニセクロハツは猛毒きのことして名前が知れ渡っているわりには実物を見た人、標本を持っている人が意外に少なく、またタイプ標本もかなりこわれているようで、有名なわりには実体がややぼけていたようである。したがって、私ばかりでなく人によっては外見的特徴や子実体を傷つけたときの変色状

況から類似きのこをニセクロハツと思ひ込んでしまっていた例も多かったのではないかと考えられた。そこで改めて福島県内で私が採取した類似きのこについて検討してみた。

上田がニセクロハツの類似菌の存在について報告した1989年頃、私もニセクロハツと似たような変色を示すきのこが気になっていた。本物のニセクロハツの生標本を見たいと思っていたが、なかなかその機会を得られなかった。乾燥標本の一部とスライドを上田さんから見せていただいたが、ニセクロハツについては私がイメージしていたきのこはやや違うように思われた。その後上田がニセクロハツ類似菌として報告している *Russula* sp. 2 (私がタイプ2としたもの) と *Russula* sp. 3

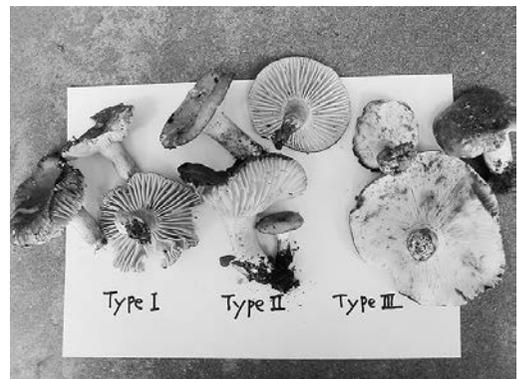


写真1 ニセクロハツ類似きのこ

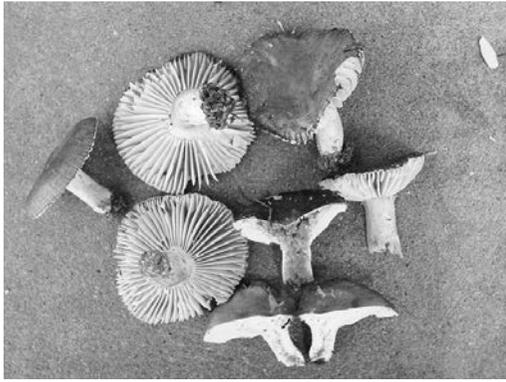


写真2 ニセクロハツ類似菌タイプ1



写真3 ニセクロハツ類似きのこタイプ2



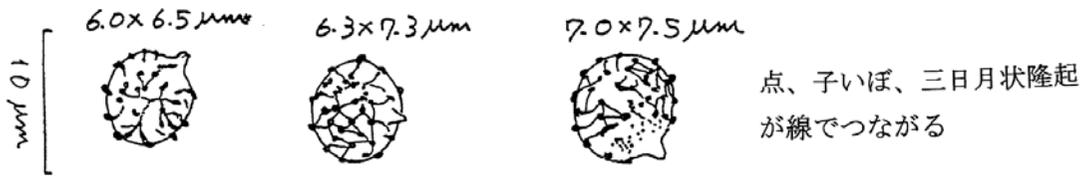
写真4 ニセクロハツ類似きのこタイプ3

(私がタイプ3としたもの)の乾燥標本をいただき、この2種に相当するきのこは福島県内にも存在することを確認してきた。この2つのきのこは別にう1種類の類似きのこ(タイプ1)を採集した。このきのこは胞子表面の模様はニセクロハツに類似するが、カサの表皮細胞の形状がニセクロハツとは異なっていた(図1, 図2, 表1参照)。

これら3種のきのことニセクロハツ, クロハツ

を含め5種のきのこの脂肪酸組成を分析した結果を表2に示したが、これらのきのこは脂肪酸組成にも違いが認められた。また、下野⁶⁾はリボソームDNAのITS領域の塩基配列に基づいてこの仲間の系統樹を作成しているが、この結果でも福島県で採取した3種のニセクロハツ類似きのこはいずれもニセクロハツとはITS領域の塩基組成が異なり、福島県には本物のニセクロハツは存在しないことが推測された。ニセクロハツ類似きのこのうちタイプ2, タイプ3は脂肪酸組成の特徴が類似しており、柄の18:0酸の組成比がニセクロハツに比べて高かった。両きのこは子実体の変色性(ややえび茶色に変色)も類似しているが、タイプ2はヒダが荒く、タイプ3は細かい。タイプ1は外観的にタイプ2より本物のニセクロハツに近いように感じられるものが見られた。脂肪酸組成の特徴も本物のニセクロハツとタイプ2の中間的な特徴が見られた。なお、タイプ1については福島県郡山市以外に福島県の新甲子温泉でも採集している。また、仙台市の青葉山で記録されているニセクロハツもこのきのこの可能性が高い。同じく「日本のきのこ」に記載されている新潟のニセクロハツもタイプ1またはタイプ2の可能性が高い。タイプ1のきのこは郡山では7月下旬から8月上旬の温度が30℃を超える高温の続く時期に発生し、冷夏の夏には見られない。それに対してタイプ2, 3は7月から9月下旬まで見られる。発生場所はいずれも松とコナラの混生林でシイ, アラカシの林ではない。今回は福島県内にニセクロハツと類似するきのこが少なくとも3種存在することを紹介したが、クロハツ節のきのこはこれとは別にクロハツモドキと言われているきのこも2, 3種に分けられる可能性も指摘されている⁷⁾。これらのきのこも含め、今後クロハツ節のきのこについては分類学的な面で詳細な検討が必要と思われる。なお、ニセクロハツ類似菌の胞子, 傘の表面構造の原図は上田俊徳氏によるものである。

また、ニセクロハツ類似きのこを含めクロハツ節きのこのリボソームDNAの大サブユニット領域およびITS領域の塩基配列にもとづく分子系統については下野が三重大学大学院生物資源学研究科紀要第40号(2014)に詳細に報告しているのでそちらを参照いただければ幸いです。下野の論文では、今回紹介したタイプ1はB5, タイプ2はB3, タイプ3はB2に相当することを付加しておく。

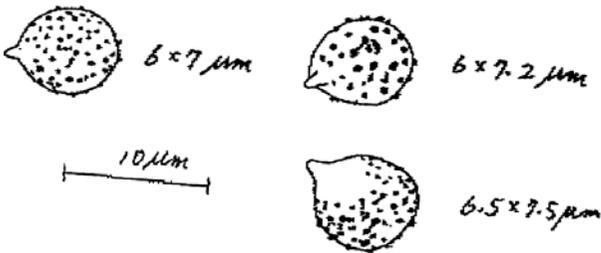
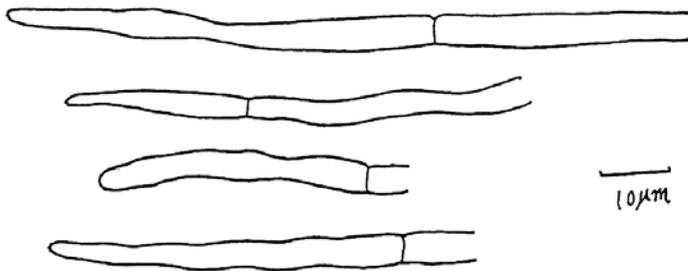


タイプ1 上田の *Russula* sp.1 とは別種と思われる

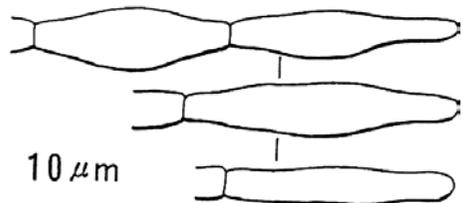


タイプ2

いぼが所々で細線でつながる

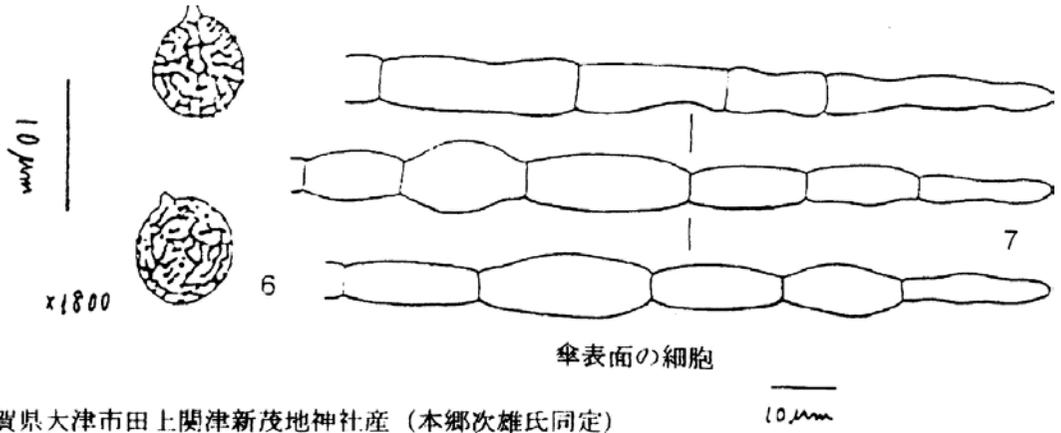


タイプ3

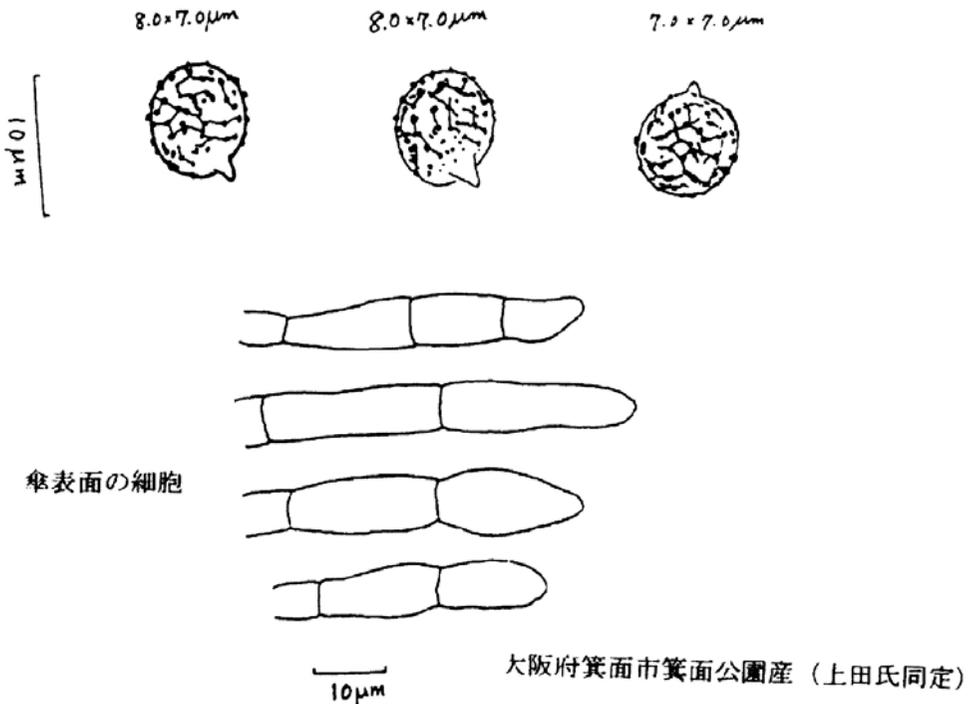


Russula sp.3

図1 ニセクロハツ類似きのこの胞子, 傘表面の細胞. タイプ1, タイプ2, タイプ3とも郡山市で採取したもの. ただし *Russula* sp. 3は上田の文献より引用



滋賀県大津市田上関津新茂地神社産（本郷次雄氏同定）



大阪府箕面市箕面公園産（上田氏同定）

図2 ニセクロハツの孢子，傘表面の細胞（上田氏のデータ引用）

最後に、上田さんの繊細な版画の年賀状をいただくことができなくなったことに一抹の寂しさを感じています。合掌。

引用文献

- 1) 本郷次雄, 堀 勝 : Nature Study 4(11), 8, 大阪自然科学研究会 (1958)
- 2) 今関六也, 本郷次雄 : 原色日本新菌類図鑑, 保育社 (1988)
- 3) 本郷次雄監修 : 日本のきのこ, 山と溪谷社 (1994)
- 4) 上田俊穂 : 菌輪, 33, 本郷次雄教授退官記念事業会 (1989)
- 5) 広井 勝 : 日本菌学会第35回大会講演 (1991)
- 6) 下野義人, 広井 勝, 高松 進 : 日本菌学会関西支部報告 (2002)
- 7) 本郷次雄 : 日本菌学会ニュース, No. 8, 5 (1987)

表1 ニセクロハツ近縁種*の比較

	ニセクロハツ	<i>Russula</i> sp. 1	<i>Russula</i> sp. 2	<i>Russula</i> sp. 3	<i>Russula subnigricans</i> sensu Weber & Smith
傘： ①大きさ ②形 ③色 ④表面の状態	①5~11.5 cm ②漏斗形 ③黒褐色，周辺はやや淡色 ④乾燥してややビロード状	①7.5 cm ②漏斗形 ③汚白色~淡肉褐色 ④つやなく周辺に僅かに糸溝	①3~8 cm ②浅い漏斗形 ③灰肌色 ④つやなく，平滑~細かなひび割れ	①6~8 cm ②漏斗形 ③暗灰褐色 ④つやなく平滑	①約10 cm ②中央が漏斗形にへこむ ③灰褐色 ④乾燥している
肉： ①色 ②変色性 ③かたさ ④臭い ⑤味	①白っぽい ②赤みがかかる ③固くしまる ④殆どない ⑤殆どない	①淡肌色 ②ゆっくり淡赤褐色になる ③極めて脆い ④殆どない ⑤やや辛い	①傘と同色~肌色 ②赤みをおびる ③極めて脆い ④アカカバイロタケに似た不快臭 ⑤殆どない	①淡肌色 ②赤みをおびる ③やや脆い ④鉛筆に似る ⑤鉛筆に似る	①？ ②赤み~淡赤紫をおびたラベンダ色 ③？ ④？ ⑤？
ひだ： ①密度 ②色 ③幅 ④柄に対する接し方	①疎 ②淡クリーム色 ③6~9 mm ④直生~やや垂生	①疎 ②肉色~淡肉褐色 ③10 mm ④やや垂生	①疎 ②淡クリーム色後にページュ ③5~8 mm ④やや垂生	①密 ②クリーム色 ③3~4 mm ④やや垂生	①やや疎 ②クリーム色~わずかにピンクをおびる ③？ ④やや垂生
柄 ①太さ×長さ ②形 ③表面の色 ④表面の状態 ⑤内部	①1~2.5×3~6 cm ②上下同太~下ほど細まる ③傘より淡色 ④不明瞭な縦しわ ⑤充実（老生すると隙間）	①太さ2~2.5 cm ②下ほど細まる ③傘とほぼ同色 ④不規則なわずかな凹凸がある ⑤充実	①0.8~2×2~6 cm ②上下同太 ③淡肌色~僅かに褐色 ④つやなくごく浅いしわがある ⑤充実	①1.5×5~7 cm ②上下同太~下部ほどやや太い ③淡灰褐色 ④つやなし ⑤充実？	①？ ②上下同太 ③淡灰色~淡色 ④表面平滑？ ⑤？
胞子の大きさ (μm)	6.5~7×6.5~9	6.1~6.6×7.2~8.1	6~7×7~8	5.5~6.5×7.5~8.5	？
胞子表面の模様	いぼが，やや細連絡糸でよくつながる	いぼが所々細い連絡糸でつながる	いぼが所々細い連絡糸でつながる	いぼが所々細い連絡糸でつながる	？
発生場所	シイ・アラカシ林地上	マツ・ナラ混合林地上？	外国産マツ林地上	外国産マツ・アラカシ林地上	Under hardwoods

*ベニタケ科ベニタケ属クロハツ節内の一群のきのこで，切ったり傷をつけたりするとその部分が赤みを帯びるが黒変しないものをここでは指すことにする。上田⁴⁾の文献より一部修正して引用

表2 ニセクロハツ類似きのこの脂肪酸組成 (%)

	部位	16 : 0	18 : 0	18 : 1	18 : 2
ニセクロハツ (n=4)	カサ	11.9	5.2	55.4	24.9
	クキ	6.7	3.7	25.2	61.3
ニセクロハツ類 タイプ1 (n=5)	カサ	12.7	15.1	36.8	32.8
	クキ	7.8	26.4	12.8	49.5
ニセクロハツ類 タイプ2 (n=5)	カサ	5.6	22.1	42.2	28.2
	クキ	3.7	38.5	23.3	30.8
ニセクロハツ類 タイプ3 (n=5)	カサ	7.9	39.4	37.3	14.2
	クキ	5.9	43.9	26.3	20.7
クロハツ (n=5)	カサ	6.9	11.1	35.7	43.4
	クキ	4.4	10.8	9.2	72.2

16 : 0 パルミチン酸 18 : 0 ステアリン酸
18 : 1 オレイン酸 18 : 2 リノール酸

(2014年6月23日受付)

上田俊穂先生の思い出

丸山 健一郎

上田俊穂先生に初めてお会いしたのは、私がまだ大学生3回生の頃、1992年の関西菌類談話会の観察採集会だったかと思う。ちょうどその頃、卒業研究のテーマを決める時期で、きのこについての調査をやってみたいと指導教官の北川尚史先生に相談して、滋賀大学の横山和正先生を紹介してもらった。たぶん、横山先生から関西菌類談話会の観察会にお誘いを受けたのかなと思うが、ちょっと記憶が定かではない。

保育社から出版されていた「検索入門きのこ図鑑」は、きのこ初心者であった私にはバイブル的な本であったが、その著者であった上田先生に出会った時は、最初かなり緊張したように思う。しかし、高校の教員であった上田先生は気さくで、学生の私にはとても親切にしてくれた。きのこに関する文献などもいくつかコピーを送っていただいた。その文献の中に「ベニタケなんて嫌いだ」というタイトルの文があって、ちょっと笑ってしまったこともあった。

関西菌類談話会の観察会にもよく参加するようになり、きのこ展実行委員などもさせていただいている中で、上田先生の器用なことに感心するこ

とが多々あった。きのこ展のポスターや記念品の手ぬぐいのデザインなど、プロの作品かと思うくらいの出来映えで、私の大切なコレクションになっている。きのこスタンプコーナーにあるゴム版画もすばらしいものだ(図1)。

また、きのこをモチーフにしたパズル作品をいくつも作っておられ、きのこ展にも置かれている(図2~5)。



図1 関西菌類談話会きのこ展きのこスタンプコーナーのために彫られたゴム版画



図2 きのこをモチーフにしたパズル作品



図5 きのこをモチーフにしたパズル作品

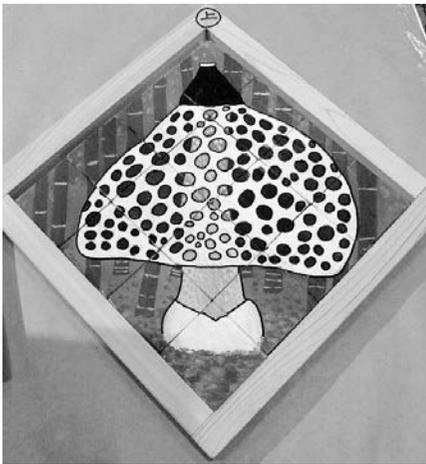


図3 きのこをモチーフにしたパズル作品



図4 きのこをモチーフにしたパズル作品

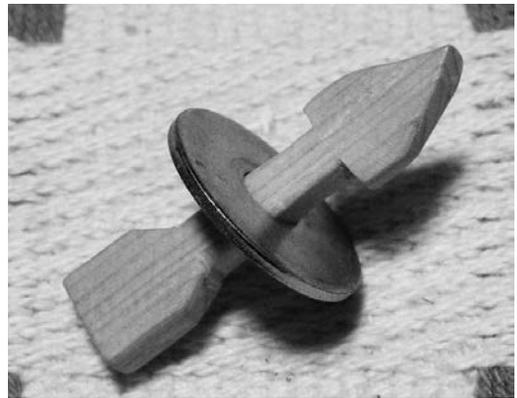


図6 ネジのワッシャーをきのこのツパに見立てた細工物

ネジのワッシャーをきのこのツパに見立てた細工物もいただいたことがある(図6)。木材の可塑性をうまく利用したものなのだが、それを知らないとても不思議な代物で、作り方を考えさせられたりした。どうやって作ったのか分からないなぁと細工物を見ていると、とても楽しそうなお顔で「簡単に作れるから、あげるよ」という感じ

でいただいた。この細工物、上田先生の葬儀の際、棺にそっと入れさせていただいた。天国でもお好きな工作を楽しんでいただけているだろうか。

関西菌類談話会の会報編集委員会でもお世話になった。いつも丁寧に校正・校閲をしていただき、ありがたい存在であった。文章の校正記号についても先生から教えていただいた。

2010年7月末に広島県の森で行われた宿泊菌類観察会では、きのこの木彫り講座を企画していただいた(図7)。材料の樫木の枝やノギリやヤスリ、電動ドリルなどの工具、仕上げに木を染める紅茶パックやガスコンロなど準備万端で指導いただいた。ストラップやブローチなどの作り方を教わった。

つい先日(2014年6月22日)、関西菌類談話会の榎原神宮での菌類観察会があった。同会場には少ないながらもベニタケ属のキノコが並んでいた。上田先生がいたら名前が付きそうなきのこなんだけどなぁと、多くの参加者がそう思ったに違いない。

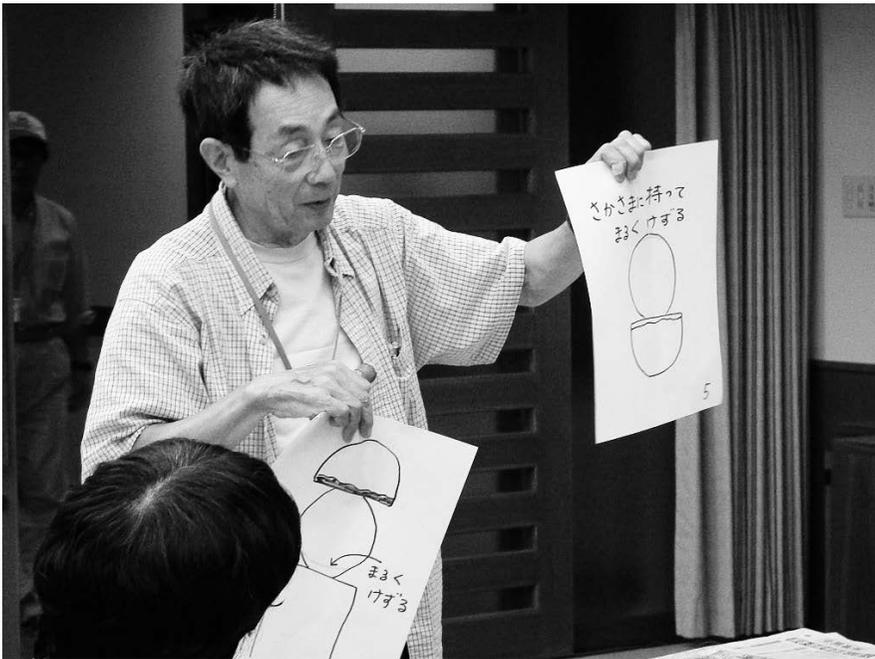


図7 2010年7月末に広島県の民の森で行われた宿泊菌類観察会で



図8 2011年7月17日、箕面きのこと観察会で

2011年7月17日、箕面きのこと観察会でのスナップ写真に先生が採集ラベルを書かれている様子が写っていた(図8)。上田先生にはたくさんの大

切なおことをお教えたように思う。本当にありがとうございました。

(2014年6月23日受付)

上田俊穂君の思い出

大阪府立大学農学部時代からの友人 西川喜朗

上田俊穂君とは大阪府立大学農学部の遺伝育種学教室時代からのお付き合いだ。この同期生は8名いて、それぞれ植物の色んな研究をしていた。昆虫採集が好きだった私は、上田君に教えてもらって、韮公園にあった大阪市立自然史博物館ともつながりを持つようになった。彼とは大峰山、比良山、北摂や京都方面へ登山や採集に行ったことや、卒業後お互いに教師をやっていたときに、生物学や博物学の資料交換をしたり、私の苦手な地学関係の資料の提供を受けたことなど、いろいろと思い出される。また旅先で見つけた昆虫やクモもよくいただいた。

上田君がなくなる3か月ほど前、初夏の夕方、彼から携帯にメールが届いた (Jun. 2013)。

「我が家の庭にコムシジらしき蝶が飛んでいます、この蝶の食草は何でしょうか、教えて下さい。」と、いうメールだった。

すぐに返信した。ホシミスジ (食草: ユキヤナギ, シモツケ・コデマリ) か、コムシジ (食草: クズ・ニセアカシア) でしょう、と。どちらの蝶も、羽を水平に広げて、何か探し物をしているかのように、やさしく陽だまりを飛びまわっているのを郊外の庭先でも見かけることが多い。

3時間後の夜遅く、メールが届いた。

「優雅な舞い方は、心が和みますね〜。 Ueda, Toshiho (四つ葉) 」

静養中の窓ガラス越しに見えるチョウのすがたに「癒される」ものが、あるいは、窓から見える情景のひとつに、人生を回想するようなことがおこるのだろうか。

その後、真夏に送ったお見舞いのメールの返信には、句読点がなく、英語のサインも (四つ葉) マークもなかった。

研究器材、教材、生物画、版画、工作、地図などに卓越した創意・工夫のセンスの持ち主だった上田君! 見習うところがいっぱいあった。それらを偲びながら、思い出をつづらせていただきます。

とし坊は力持ち

とし坊とよばれていた上田の弁当箱は、薄くて平たいノート型で、フタが横にずれるぐらいにご飯がいっぱい詰まっていた。京都から大阪の堺市の大学まで、そして夜遅くまで勉強するエネルギー源だった。一見やさしそうだが、専攻生たちで腕相撲をやったときは、彼は2番目に強かった。

ある日の夕方、テニスコートの横のヤナギの木の下に大きなキノコを見つけた。彼は「ヤナギマツタケ」や、という。口から出まかせで言うようで私は内心不安だったが、二人で焼いて食べた。上田がひとくち食べたあと、私は少し間をおいて食べた。マツタケの香りがしておいしかったことを覚えている。

キノコ図鑑のスケッチ

上田君は学部生の時からやっていた、キノコの分類や染色体の研究を大学院でも続けていた。助手のK先生ともよく息が合って、いかにもキノコの専門家的な風格が感じられた。

染色体の顕微鏡観察が続くときは、ふたつ折りにした濾紙にプレパラートを挟んでその上から右手の中指でトントントンとリズムカルにたたく音が木造の実験室に響いていた。ある時、その中指の短く切った爪を見せてくれた。こうしてたたくと、カバーガラスが割れないし、染色体が広がって見やすいのだと、大切な「コツ」を教えてくれた。

将来、キノコ図鑑を作るために、キノコの水彩画も描いていた。写真より奇麗で特徴がよく表わされていた彩色図だった。

ピーナッツ事件

専攻生たちが実験室でおつまみを持ち寄って雑談をしていた時、大変な事件がおこった。

一人が何か固いものを噛んだのか、「ウワッ」と何か吐き出した。見ると、くだけたピーナッツと普通の一片のピーナッツだ。歯型がついているが形が残っている、噛み砕かれてない! 硬いピーナッツだ! みんなかわるがわる手に取って見た。

どう見ても普通のピーナッツだ！誰が見ても普通のピーナッツの片側だ！！付け根の胚もちゃんと付いている。歯型を付けたM君がよく見ると、「なんや！木や！」年輪のようなものがうっすらと見える。「木や！木や！」「なんでや！」「誰が持ってきたんや！」と騒いでいると、やっと上田が、すまなさそうな、してやったりのような顔で「オレや」と申し出た。色といい、形といい、内側のくぼんだ線といい、胚のギザギザの形といい、じつによくできていた。99パーセント、ピーナッツだ。こんな精巧な物は上田でないと作れない！ガリッとやったM君は相当の負担が顎にかかっただろうと想像できた。

大峰山のナメコとカカーリア

二人で奈良の大峰山の洞川から山上が岳、弥山まで縦走した時（Nov. 1962）、はじめの無人小屋の「小笹の宿」で、夕食の用意をしていた時、腰掛け石の上に置いていたすき焼き用の肉がなくなった。いつの間に現れたか、おとなしそうな犬が横にいて、そいつが食べてしまったようだ。この犬は大普賢岳、行者還、そして弥山の小屋の先までついてきた。頂仙岳の下の双門の滝付近の木のはしごが続くあたりで、うす暗くなりかけた時、クマに出会った。「オイ」と小声でうなづいた二人は、クマから目を離さないで、そおーっとその場にしゃがみ込みながら、足元の石ころと棒切れを拾っていた。クマは一向に動かなかった。クマは枝つきの枯れ木のようなので、ひと晩余分に、大きな石の陰で野宿した。翌日、白川八丁の伏流の川原を下って林道に出て、川合への国道に出たときはほっとした。ふたりでよくしていた思い出話だ。

山では上田が鑑定した、傘の直径が4、5センチのナメコとワサビの葉を刻んで味噌汁に入れて食べた、おいしかった。家に持って帰ったナメコは、家の者はだれも食べてくれなかったが、母親だけが食べてくれた。

この縦走で林の中を歩いていた時、上田が「これ、カカーリアいうねん、カニコウモリや、オレ

これ好きやねん」と教えてくれた。地味なキノコの植物だ。あの時以来、山道で涼しげそうな、ガザミの甲羅のようなカカーリア *Cacalia* を見ると、山にも強かった上田を思い出す。

余野のゴキヅル

上田君が結婚した前の年（Sep. 1966）、大阪府豊能町の余野方面へ植物採集に同行した。和代さんも一緒だった。平たい鉄棒の先をとがらせた長さ30センチほどのサーベルのような自家製の根ほりを器用に使って根を掘っていた。彼が使う道具は面白いものが多い。秋に出かけることが少なかつた私には、秋の草花が次々とたくさん観察できて楽しかった。

ツリガネニンジン、センニンソウ、トキワハゼ、サクラタデ、イシミカワ、ミゾカクシ、タカサブロウ、マツカゼソウ、……名前だけでなく、コメント付きで教えてくれた。とりわけ印象深かったのは、このとき初めて見た「ゴキヅル」だ。実も名前も愛嬌があって、ポツッと果実の下半分を割って見せてくれたのも面白かった。

行けなくてゴメン！

2、3年前、病状が回復して、もう大丈夫のようだと思っていたころ、長居の自然史博物館で別々の催しもので来ていた上田君と出会った。その日、「オイ、あんな、生きてるうちに津軽半島へ行けへんか！」と話しかけてきた。一瞬「えっ」と思ったが、その言葉には真剣な重みがあった。元気になったんやと思った。「おーそうか、おれもミズグモのその後、見ときたいねん。いつでもええで！」と言って、その日は終わってしまった。なぜ津軽だったのか、なにか調べたいキノコがあったのか、何かいい思い出があったのか。その後も詳しく聞き出すことができないままになってしまった。あの時、すぐに行ついたらよかったと悔やまれる。

上田くん、いろいろありがとう、元気でな！

(2014年6月25日受付)

上田俊穂さんの思い出

河合 繁 好

私は上田俊穂さんの高校の同窓生で、きのことは何の縁もなかった者です。高校は京都市立洛陽高等学校（現 洛陽工業高等学校）で工業課程工業化学科に3年間同席していました。

当時、京都は蜷川府政の長い間の影響か総合性と言って、工業課程も普通課程も同じ学校で学ばせるということで工業課程を単独の学校にはしていませんでした。（商業課程も同じだったと思います）。

当時、日本はまだまだ貧しい国でしたし大学へ進学できる生徒は限られていたようで、工業課程の生徒にはかなり優秀な生徒もいたのではないかと思います。

ほとんどは卒業と同時に社会に出て即戦力として仕事に就くのが普通の状況でした。それでも大学進学への道を選んだのは工業化学科40人のクラスで3名ほどは進学の道を選んだようでした。

上田俊穂さんも確か神戸税関に就職が内定していたのではなかったかと思います。

ところが急きょ進学の道を歩むことを決心したようでした。

工業課程から進学するのはかなり大変な苦労があったはずですが。なぜなら工業課程の授業は専門科目（無機化学、有機化学、分析化学、物理化学、化学工学、等々）が多く、大学受験科目にあるような授業は十分でなかったからです。

大学受験科目とは関係ないかもしれませんが、美術や音楽、あるいは漢文や古文、あるいは理科では選択科目の中にも生物、等の授業はありませんでした。

そのような中、彼は大学受験を決意し、1年間浪人をして大阪府立大学農学部合格し、大学院修士課程も修了して高校の生物の教師になったようです。

彼は高校生のころからきのこに興味をもっていて、工業課程の生徒がほとんどいない「生物クラブ」に所属していました。

神戸税関にそのまま就職していれば、彼のきのこに対する興味は途絶えていたかもしれません。彼がいくつかの困難を乗り越えて進学を決意した

のは「きのこへの思い」と言うのが強くあったのではないかと思っています。

さて、きのことは何の縁もなかった私が少しだけきのこの縁ができたのは4年近く前の高校の同窓会のときからでした。

私は70歳になって放送大学大学院に入学が決まり、研究テーマを具体的に決めなければならないときでした。

今までに地球環境問題に関心を持っていて、この環境問題が生物に与えている状況を調査しようと思っていました。例えば、地球温暖化の影響、酸性雨の影響、オゾン層破壊の影響などでした。結局、温暖化の影響について調査しようと思い、サクラの開花日・モミジの紅葉日の変化、高山植物の変化、サンゴ礁の変化、等の研究をされている研究者様等に接触を重ねていました。

俊穂さんが生物の教師をされていることから、そんな状況を彼に話していました。

その後、俊穂さんからオオシロカラカサタケと言う熱帯性のきのこが広まっているようだとの話を伺いました。この件を温暖化との関係で調査するのはおもしろいのではないかと思い、放送大学大学院の教授にも相談し研究テーマを「熱帯性きのこ“オオシロカラカサタケ”の日本国内での分布の拡大状況」と決定しました。

それ以後、俊穂さんにはずいぶんお世話になりました。何度も彼の家にもまでお伺いし、私の家にも資料を持ってきてくれたこともありました。そして研究について相談に乗ってもらい、研究レポートや論文の添削などもやってもらうことになりました。

俊穂さんはきのこ図鑑等で共著も含め多くの著作があり、全国のきのこ研究者の間でよく知られた人でした。（私は高校卒業後同窓生たちと長い間、疎遠になっていたためこの頃の彼の活躍を私はよく知りませんでした）

そんな中、彼の病気は進行していったようでした。ある時「70歳過ぎまで生きたのもういいか」「身辺整理を始めているんだ」と力なく言っていたことがあり、私が「この論文が仕上がるま

で元気でいてくれないと困るよ」と冗談めかして言ったとき「そうやなあ」と元気なく言っていたものでした。

そして2013年2月の始めごろ論文は俊穂さんの助けがあり合格しました。その後3月頃だったか私がよく行く桂の居酒屋で一献傾けることになりました。この店には別の同窓生ともよく行っているのので、その彼にも付き合ってもらいました。その時、俊穂さんはいつになく饒舌でよくいろいろな話をしてくれました。

これ以後、入退院も多くなり会う機会もなくなりました。最後に彼からEメールが届いたのが5月28日でした。「オオシロカラカサタケの研究を今後も続けてください。また協力させてもらいます」というものでした。

私のこの小さな研究が2年間で一応一段落したのですが、もし不合格になり、あと1～2年、今も私が取り組んでいたら彼はもう少し頑張ってくれていたのではないかと思っているところです。

(2014年8月3日受付)

会報記事投稿のご案内

～皆様の投稿をお待ちしております～

- ◇原則として、投稿資格は本会会員に限ります（編集委員会から依頼する場合は例外とします）。
- ◇キノコやカビに関する記事、図、写真やイラスト、本誌に関するご意見などをお寄せください。
- ◇原稿の量は問いませんが、1600～2000字を目処にまとめていただくとう幸いです。もちろん、これよりも多くても少なくてもかまいません。
- ◇図やイラストは黒インクで、刷り上がりの1.5倍程度の大きさでお描きください。カラーでの印刷はできませんので、白黒でも見やすい原稿の作成をお願いします。
- ◇写真の掲載を希望される場合は、あらかじめ編集委員会までおたずねください。（写真製版料をご負担いただく場合があります）
- ◇原稿は下記の送付先にお送りください。別紙に著者名、連絡先（住所・電話番号・FAX番号・電子メールアドレス）を書いて添付ください。ワープロなどをお使いの場合は、フロッピーディスクなどにテキスト形式のファイルで保存されたものを添付いた

- くようお願いいたします。また、電子メールを利用できる場合は、電子メールでの投稿も歓迎いたします。
 - ◇原稿の採否、掲載の順序、レイアウト等は、編集委員会の決定にお委せください。
 - ◇編集委員会は、著者の原稿中の字句、表、図、写真などのスタイルの統一や変更を求めることがあります。文章の用法上、あるいは、文法上の誤り、その他の修正は編集委員会にお委せください。
 - ◇原稿には表題、著者名、本文のほかに必要な場合は引用文献（あるいは参考文献）をあげてください。
 - ◇著者校正は、初稿だけとし、原稿正本とともに返送ください。
 - ◇掲載された原稿はお返ししませんが、図、写真に限り著者校正の際にお返しします。
- <原稿送付先>
関西菌類談話会 会報編集委員会
正井俊郎
〒673-0844 明石市東野町2043-15-101
TEL : 078-917-3923
E-mail : toshiro@mug.biglobe.ne.jp

編集委員：橋本貴美子，小林久泰，丸山健一郎，正井俊郎[○]，森本繁雄，(abc順・[○]印は編集委員長)

編集後記

就職のため東京から大阪へ移り住み、縁あって関西菌類談話会に入会して上田俊穂先生のお名前をはじめて知りました。入会した年に参加した伊吹山での宿泊菌類観察会で、上田先生がビール瓶を片手に持ちながら「きのこ」の担子器をととても上手に説明されたことを今でも鮮明に覚えています。

その後私も関西菌類談話会の運営に関わるようになり、上田先生とお会いする機会も増えました。役員会あるいは菌類観察会などでお会いするたびに、物静かで穏やかな人という印象を強く持ちました。

ところで、ここ数年上田先生の体調がすぐれないことには薄々気づいておりましたが、佐野修治さんを通じて関西菌類談話会の役員を勇退したいとお申し出を頂くまでは、それほど体調が悪くなっているとは思っておりませんでした。

お元気になるに違いない、元気になって欲しい、という思いから上田先生からの役員勇退の申し出を役員の方にお伝えするのを躊躇しているうちに、上田先生は旅立ってしまいました。まだまだお元気でご活躍できたかったのに本当に残念です。

さて上田先生が逝去されたとの連絡を佐野修治さんから受けたときに、関西菌類談話会会報で追悼号を編集して上田俊穂先生のご霊前に捧げ、これまでのご指導に感謝したいと思いました。追悼号発行を役員会で提案したところ役員の方々に賛同して頂きました。そこで会員の皆様から関西菌類談話会会報上田俊穂先生追悼号への原稿を募集したところ多くの会員から玉稿が寄せられ、さらに上田先生の同級生からも思い出の記を寄せて頂くことができました。

皆様から寄せられた玉稿を拝読しながら、上田俊穂先生の人としての素晴らしさ、本当に優れた教育者であったことを再認識させて頂きました。

ところで多くの方から原稿を締切日前に頂戴しておきながら、私の個人的な事情で追悼号の刊行が遅れてしまったことを、最後にはなりますが寄稿者の皆様に深謝いたします。

この会報を読みながら在りし日の上田俊穂先生を偲んで頂ければ幸いです。

関西菌類談話会 会長 天野 典英

関西菌類談話会会報 No. 31

2015年1月15日 印刷

2015年1月20日 発行

編集 関西菌類談話会会報編集委員会

発行 関西菌類談話会

発行所 関西菌類談話会

ホームページ <http://kmc-jp.net/>

事務局 〒616-8182 京都府京都市右京区太秦北路町3-3
309号 北岸 阿佐子 方

郵便振替口座 00950-0-83129

印刷所 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る